
少年ユウサク物語（青春編）

ユウサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年ユウサク物語（青春編）

【Nコード】

N7225E

【作者名】

ユウサク

【あらすじ】

少年ユウサク物語の続編です。高校性になったユウサクは「女にモテたい！」と思い友達とバンド結成！不純な動機のわりにはハマっていきます。これからがユウサクの青春時代の波乱万丈の幕開け！

始めたきっかけはもてたかったから（前書き）

高校生になった男の考える事といえば・・・
女性にもてたい男子高校生が考えた末に選んだ道。

始めたきっかけはもてたかったから

「俺がギターするやる！・・・でセイがドラム買っやん？・・・ユウサクはなんか楽器のあてあると？」

（俺、ギターがよかったな・・・）

「うんにゃ・・・ないけど。俺さ・・・」 「じゃあユウサクベースね！、クラの兄貴がベース売りたいっていいよったけん。あれ買い！？なんかユウサクって楽器出来そうにないもんね（笑）ベースなら簡単そうやけん、よかる！？」

・・・「あ、うん。」

ユウサクのパートはケンの指示により、弦の数すら知らないベーストに決定してしまった。無口だが頑固なセイは最初からドラム希望だったし、ケンはまだギターを借りて練習を始めているらしい。ユウサク17才の夏の事である。

クラの兄貴から1万円で譲り受けたベースはお世辞にも「いいもの」

とは呼べなかった。それでもまわりに遅れをとるのは嫌だったので、課題の曲を何度も何度も聞いては音を出して練習した。

（結構おもしろいかも・・・）ケンとセイは タブ譜で練習していたが、手違いでユウサクにはタブ譜が届かなかった。併せの練習で、ユウサクの演奏を見て、ケンが、「譜面と弾き方違ってない？」と言いだしたが（譜面ってなんや？）音だけを頼りに練習してきたユウサクの演奏は悪くはなかった。

毎日楽しかった。楽器を触ることが楽しくて、寝る間も惜しんで練習に励んだ。ひと月たった時にユウサクは違和感を覚える。やっていくジャンルもそうだが、まわりがユウサクに追い付いていないのである。

（ベースが簡単だからかな・・・）多分練習のしすぎなのだが・・・

Ｊポップのカバーのバンドで、ケンの好みで「佐野元治」などを中心にラインナップしてライブもやった。ものすごく気持ち良かった。

人前でのパフォーマンスに快感を覚えた瞬間だった。

ライブが終わってひと月程たったある日、高校の帰りがけに声をかけられる。「ユウサク、ユウサク!!」

振り返ると、カットシがいた。同じ中学出身だがあまり話した事はない・・・

「この前のライブみたよ、うまいやん！」

「えッ・・・いやあ・・・まだ始めたばかりやけん。」

以外な褒め言葉におどろきつつも悪い気はしない。しかし・・・なぜ声を掛けてきたのかが判らない。

帰り道にいろいろ話をした。カットシもバンドをしている事は人から伝え聞いていた。それなりに本格的にロックをやっているらしい。

ベースに決まったメンバーがおらず困っているとの事。

「次のライブでベースしちゃうん？」

少し自信がついてきて、自分がどのくらいやれるかが気になっていたユウサクはやってみたかった。だからケンやセイに相談もせずに戻事をした。（やる）と・・・

メンバー顔合わせはユウサクの家でおこなわれた。ボーカルのカットシ、ギターのアサダは同じ中学なので自転車と原ちゃりで、ドラムのコウシロウだけははるばる電車とバスを乗り継いでやってきた。

アサダは中学時代の記憶で（すごくチビ）だと思っていたのに・・・

ユウサクよりも一回り大きく成長していて、態度もふてぶてしかった。

「ユウサク、お前シカツと弾ききっちゃろーね・・・リズム乱すなよ」

アサダの実力など知りもしないユウサクだが、カチンときた。

「お前がどれほどのもんか知らんばってん、そげなこと言うんやっ

たらそりゃあ・・・うまかつちやるーね。はよ練習にいつてからそのギターテクばみせてもらおうやないか。ああっ？」

「なんてかきさん!!」

胸倉をアサダにつかまれて振り回されたユウサクは自分のベッドまで投げ飛ばされる。

「なんしょーとか!!きさま!!」

声を荒げて凄むが、とても太刀打ちできる腕力ではなかった。

「お前ら顔合わせで喧嘩しやんなよ・・・ほらアサダ、ユウサクにあやまれ。」

「こいつがしやーしーけんやろうもん！」

「ああっ！いいけんあやまって終われ！」

カットシが声を荒げるとアサダは素直に？あやまった。

「すまんかったね・・・でももうおうちやくい事言つなよ！」

言われてはいそうですかとユウサクは言えなかった。

「それがあやまりよう態度や！頭下げて「すいません」っていわんか」

一瞬立ち上がりそうになったアサダだったが、カットシの手前仕方なく「すいません」とあやまった。（内心ほっとしたユウサクだった。）

もう一人のメンバーコウシロウは

（こいつほんとにロックとかしよんやるか？）

と思えるほどおとなしく、やさしげな顔で、まるでロックとは無縁な雰囲気を持つ男だった。

そんなこんなで顔合わせも終わり、練習は次の週からに決定。課題曲もきまり毎日練習に励む。「ザ・モッズ」の曲だった。あまりにも今までとジャンルが違うため、慣れるまでに時間がかかったが2日もすると音が耳から入ってくるようになった。ただのバンドマンだったユウサクはこの日から「ロックミュージシャン」になった。

始めたきっかけはもてたかったから（後書き）

今回は書きながらの投稿ですので、更新には数日かかる事もあると思います。ゆっくり読んで下さい。

第三部連載開始しています。過激すぎたので、今回は18禁！18才以上の方はノクターン・ノベルズにて「ユウサク物語」を検索してください

青春はバブルでした。(前書き)

新しいバンドに加入したユウサク・・・だが、レベルが違いすぎてついていけない！どうするユウサク！！

青春はバブルでした。

「あぁっもう！・・・ユウサク！！ビートロックばやりよっちえ！
ビートロック！わかつとう？」

初めての練習日・・・ユウサクは付いていけなかった。

「お前くさ！横着こくひまがあつたらもつと練習してこいよ！」

アサダにボロカスに言われても言い返す事も出来なかった。

ユウサクにとって二つ目のバンド「アウトレイジ」はユウサクの想像よりもはるかにレベルが高かった。何度併せても、どうしてもリズムについていけない。悲しくなるほど乗れていなかった。

ドラムもギターも自分が体験した事のないレベルの演奏で、併せるのが申し訳ないほどだったのである。（これじゃ、アサダにいいか
えせん。）

家に帰っても気分は戻らず、その日は練習せずに寝てしまった。

そして次の日、ケンとセイに連絡をとる。バンドかけ持ちの話をする為である。

黙って聞いていた二人だったが・・・ケンが口を開いた。

「・・・で、ユウサクはどっちがやりたいと？、かけ持ちする意味がわからんし、俺たちとじゃあ真剣にやれんって事なん？」

「いや、そうじゃなくて、ただやってみたいっちゃんね。しばらくかけ持ちはだめやろうか？」

しばらく考えてからセイが口をひらいた。

「かけ持ちやら、中途半端やろうもん・・・うまくは言えんけど、今やりました事が向こうにあるなら、やっぱり向こうでやるべきやない？」

ケンがわざと冷たく続ける。

「うちは入りたいってベースリストほかにもおるしね、ユウサクより上手な奴！」

しばらく考えてからユウサクは二人に甘える事にした。

「すまん！、自分勝手な事して。でも絶対うまくなるけん！！」

こうしてバンドを立ち上げて3か月でメンバーチェンジ、ユウサクは正式に「アウトレイジ」のメンバーとして活動を始める。

それから半年間のユウサクの練習量、上達ぶりは凄まじかった。この後のどの時期よりも練習にうちこんだ。アサダと対等な立場になりたかったのである。誰にも習わなかった為に

「基本ができてない」

などと指摘される事もありはしたが・・・逆に

「こんなの見たことない」「新しい」などと言わせるほど、独自のベースラインやテクニク、アドリブなどで自分をアピールしていた。

その頃になるとバンドのナンバーは全部オリジナルになり、(当時の高校生バンドとしてはちよつとしたものでした。)ライブの観客動員も少しずつ増やしていった。

1980年代半ば、博多にはいくつか有名なライブハウスがあった。

国道道路の「徒楽夢」（ドラム、今のロゴスとかの元）大名の「多夢」（タム、この頃閉鎖）「80'ファクトリー」（すでに閉鎖口ツカーズ、モッズなどで有名）チューリップや、海援隊、井上陽水などを排出した「昭和」はこの頃すでになかった。（1990年代後半に復活します。レミオロメンなどで有名）実力をつけたバンドは有名なライブハウスに出演する事で、ツアーやスカウトなどのチャンスを増やすのに躍起になっていた。（こういうライブハウスはオーディションに合格しないと出演出来ません。）

ユウサクとカトシは博多で当時観客動員ナンバーワンを誇っていたバンド「ザ・キッズ」の正月ライブのチケットを手に入れた。会場は憧れの「多夢」、最初はバンド全員で！と言う話だったが、アサダとコウシロウはバイトでいけないという事で、他のバンドでドラムをしているというサトシを加えた3人で行く事になった。サトシとは初だが、気さくな人間で、よく話しかけてくれ、共通の友人も多かった事ですぐにうちとける事が出来た。

（このサトシと、ケン、セイとは20数年たった今でも付き合いが続いている。）

実力のあるバンドのライブを見るのも初めて、おまけによると触ると喧嘩になるアサダもない事で、ユウサクははしゃぎまわっていた。

ライブは期待以上、真冬に汗をかく程興奮した。気がつくとも2人がいない・・・「あれ？」

探してみると、3人組の女性と喋っている。

よく見れば、3人のうち2人は ワンレンボディコン！！

（説明しよう！ワンレン＝ワンリングスで段のないロング、またはセミロングヘアーを指します。ボディコン＝ボディコンシャスかなりピタツとしたドレスを指します。まさにバブル万歳ネタでした。）

（うわゝ・・・よか女やん！）そしてその2人より頭ひとつちやいもう一人の女の子はベリーショートでパンクヘアーでした。（なんか変わった女の子のごたあ・・・ちっちゃいし。）

サトシとカットシはいわゆる、「二枚目」（いけメン？）ユウサクはまったく普通の目立たない顔である。こんな場面にまったくなれていないユウサクは終始無口を通した。聞き耳をたててみると・・・

サトシが話の主導権を握っている。どうやら自分達は「大学生」という事になっているようだ。余計に喋れなくなるユウサク。

ボディコンの2人がサトシ、カットシと喋っているの、自然とユウサクはパンクな女の子と向き合う事になる。よく見てみると眼鼻立ちのはっきりした整った顔（美人）で、面食いのユウサクにとって完璧なストライクだった。人生初の「一目ぼれ」である。相手の三人は高校三年生・・・ひとつ年上の女の子だが、話の流れ上大学生として振舞わなければならない。

「俺、ユウサクって言うっちゃけど・・・名前は？」

「・・・ユリ」

「へっ……ユリちゃんかぁ……」

「……うん」

会話はまったくはずまなかった。

そのまま連絡先もきけずに帰る時間になり、女の子たちと別れてがつくり肩を落とすユウサクであったが、カットシがこう言った。

「ユウサク……一目ぼれ？」「ええっ……ばれた。」

「多分全員……なあサトシ」「おお、相手の子以外は気がついたぜ！おれらその話でもりあがったもん。」

「まじで……」

カットシは続ける。

「心配すんなって、次のライブのチケット渡したら3人ともくるって言いよったぜ！そんな時に電話番号きけよ！」

持つべきものは友である。

はたして次のライブにユリちゃんを含む3人は約束通りに来た。さつそく電話番号をきいたユウサクだが、ユリはあっさり教えてくれた。

それからというもの、3日に一度は電話をかけてお互いの話を話した。

(これならそのうちデートとかできるっちゃんないかいな・・・)

喜ぶユウサクに女神はほほ笑まなかった。

ある事件が起きたからである。

つづく

青春はバブルでした。（後書き）

中学の頃に告白されて女の子と付き合った事はありませんが、手も握らずに別れました。女性に免疫がないユウサク！これからどうなるのでしょうか？

初恋（前書き）

年上の女性に一目ぼれしたユウサクは空回り・・・彼女とうまくい
く事が出来るのか??それとも・・・

初恋

季節は2月下旬・・・まだまだ福岡の冬は終わりそうもない。ユウサクは学校が終わって何とか間に合った電車からおりてホームを急ぎ歩きで歩いていて。(うわー・・・バイト間に合うかいな?)

エスカレーターの降り口に向うその時に上ってきた女子高生とぶつかりそうになった。

「あつすいません」

「・・・」あやまったのに相手はじつとユウサクをみている。

(なんかいな? 気持の悪かねえ・・・この女)

反応がないのでそのままエスカレーターに乗ろうとすると・・・

「ユウサクさん? よね」声をかけられて振り返るとさっきの女子高生。

「やつぱり!!! 高校生やったと?!!」

「・・・?!!!」

意味がわからず人の流れでエスカレーターに押し込められ、ゆっくり考えてみる。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

まじかの女子高生だった。

そしてユウサク達は……大学生でなければならないのである。

いまま2ヶ月が過ぎていたのだった。

(どげんしよう?・・・ばれた!ばれた!ばれたあ!!)

からは

なるなら告白したらよかやん!! はーっもういらいらするねえ!」

などといわれアサダからも

「おう！はよう、ふられてこい！！笑っちゃあけん！」

と言われる始末。

「やかましかー！」といじけた返事しかできない自分自身にいららする。

（よし・・・決めた！）

ユウサクは意を決してユリに電話をする。「久し振り！元気やった？」普通に話してくれるユリに（もしかして聞いてない？）などと薄い希みを抱きつつも、初めてデートに誘ってみる。

「あのさ、話したい事もあるけんが、今度の日曜、映画にでもいかん？」

「うん・・・いいよ！ちょうど空いてる。」

意外なほどあっさり返事がもらえた事に少々拍子抜けしつつ、（やったー）テンションは絶好調！！

慌てて銀行に行き次のライブの衣装代として貯めていた金を下ろす。

ユリに似合いそうな指輪を探し、丸一日かけて選んだ。ユウサクが女性に贈り物をしたのはこの時が初めてだった。

当日、待ち合わせの場所で、まるでライブに行く時のように決めていたユウサクがたっていた。

時間はもうとづくに過ぎている。（こんとかいな？）

30分遅れでユリは来た。

「ごめんなさいちょっと遅れた・・・待ったろ？」

「いやあ・・・俺も遅れてきたけん、そげん待ってないよ」

（実はユウサク、30分前についていたので、都合1時間まっていたのだが・・・このユリという女性、大変な遅刻魔であり、ユウサクとはこの後何度か待ち合わせするが、時間通りに来る事は一度もなかった。）

とりあえず映画をみて食事、覚えたてのバーに連れて行き酒をあおって勢いをつけた。夜になり自宅まで送って行く途中の公園で立ち止まる。

「ばれとろうけん白状するけど・・・俺じつは高二で17才やん。」

「うん・・・知ってた。言ってくれるのまっとうた。」

「ごめん！だますつもりじゃなかったっちゃけど、なりゆきで・・・」

「まあ・・・いいたい！許す！」

「勢いついでに告白するけど・・・俺、ユリちゃんの事好いとっちゃんねえ・・・付き合ってほしい！」
そういつて買っておいた指輪を渡す。

「うわー・・・がんばったね！ありがとう大事にするね。」

「ええっ・・・じゃあ・・・」「ごめんなさい」

「あっ・・・えつと・・・え?!」

「基本的に年下だめ！好きな人おるけどすつごい年上やし。ユウサクさん・・・くんはきらいじゃないけど、対象外！あっ年下ってわかったけんじゃないよ、最初から・・・ごめんね。」

玉砕である。

別れ際にかなり・・・いや今にも死にそうユウサクのほうを向いて、ユリは

「ちよっとしゃがんで、耳かして」といった。

（今更なんの内緒話だよ）と思いつつも言われた通りにすると、

「チュツ」頬にあつたかいものが・・・

「正直に言ってくれた事と今日のお礼」

天にも昇るような気持ちだった・・・が。
ユウサクは厚かましくもお願いする。

「じゃあ、こっちにも」そういつて逆の頬を指す。

「もう・・・わかったよ。」

そういつてユリが背伸びをした時にユウサクはユリの方をいきなり向いて……「ブチュッ」びっくりしているユリは止まっていたが。

「もう！なんしようと！……ずるい！」そう言ってもあとのまつりである。

「ありがとう！記念になった♪、じゃあね！」

振られたのに「ちゅう」をゲットしたユウサクであった。

もちろん、報告をきいたアサダはずうつと笑い転げていたが……
ユウサクの少し遅い初恋はこうして幕を下ろした。

つづく

初恋（後書き）

さて・・・これから女性体験が加速度的に増えていきます。ご期待下さい。

「ゲラナダ」というバンド（前書き）

いよいよ高校卒業、彼女ができたり別れたり忙しい毎日を送るユウサク、そんなユウサクが運命のバンドそして運命の女性に出会う。

「グラナダ」というバンド

「俺、やっぱ就職するけん・・・すまんユウサク、専門学校一人でいつてくれ！」カットシがいきなりそう告げる。

「えっ・・・バンドはどげんすると？」

「でもアサダも就職やし、コウシロウは受験でバンドもかけ持ちやけんちよつと無理やろう・・・しばらくは休止やね。」

もともと希望する科に入学した訳ではなく、就職活動すらまともにやってなかったユウサクは楽に進学できて就職率が高い専門学校に進路を決めていた。推薦もらえれば「合格」な訳で、とりあえずは何もする事がなくなってしまった。（なんか暇やねえ・・・）

バイトもやったり辞めたり、その場その場で金がいる時だけ働いていたので・・・（バイト三昧ってのもねえ・・・）

彼女もない身でやることがないというのはなかなか淋しいものだ。

高三に上がる頃、ライブを見にきた女の子に告白されて、付き合った。

かなりの美少女で、最初はからかわれてるのかな？とも思ったが、家が離れているのに、わざわざ電車やバスを乗り継いできてくれる姿はいじらしく。ユウサクもだんだん好きになりかけていた。

デートのたんびに必ずキスをした。人けのないところでなら、舌を

絡めたり、吸い合うように激しいキスをする事もあったが、その愛らしい胸に手が触れる度に「嫌・・・だめ」と言われ、素直に止めてしまうユウサクだった。無理やり押し倒して思いを遂げる！程の情熱をその娘に感じていなかったのかもしれない。（単にどうしたらいいいかわからなかったのだが・・・）そんな事が二度三度続いて、（嫌ならもういいや）ユウサクは自分から電話するのを止めてしまった。

彼女からはしばらく連絡があったが、（めんどくさい）

ユウサクはあまり誠意がある態度をとらず、い留守さえ使った。

一月後に彼女から手紙が届き、ユウサクの事は真剣に好きだったこと、他の人からずっと好きだと言われていてどうすればいいか判らない、というような内容だった。ユウサクはすぐに電話をかけて、「自分の好きにしたらいいい。別に留める理由はない。」と冷たかった。

その一月後にまた手紙が届いた。彼女に好きだと言っていたのはユウサクも知る共通の知人だった事と、その人と付き合いたした事が克明に書かれていた。悲しくなければ嫉妬も感じなかった。これで良かったのだと、ユウサクは納得していた。

（彼女に対してもう少し強引にしていればまた違った結果が生まれていたはずだが、ユウサクはこの頃、あまりにもウブだった為にその事に気がつかなかった。）

その事があってから、バンド関係の女性に興味を持てなくなっていた。

しばらくして専門学校の試験も終わり、ユウサクは暇をもてあまし

て、博多駅にある喫茶店でバイトを始めた。店長はいい人、スタッフもみんな優しいけれどもいい人ばかりの職場だったが・・・一週間程務めた後、出勤する為のバス代（電車賃かどちらか忘れました）がない事に気づき、親に借りようとしたが、自宅におらず、どうしようかと途方にくれていると時間は過ぎてしまった。職場の人がいい人ばかりだったのがアダになり、病欠などと嘘の電話をする事も出来ず・・・

結局さぼってしまい、次の日からもバイトに行き辛く・・・何度も店長から電話を貰ったが辞めてしまった。（かなり後悔した。）

またもや暇になってしまったユウサクに受験が終わったドラムのコウシロウから連絡がある。

「もう一つのバンドが（かけ持ちしてた）再結成してベースが決まっていなかったけど、うちのボーカルがユウサクの音が好きやけん、弾いてほしいっていいよっちゃけど・・・暇ある？」

一瞬まよったが、刺激に飢えていたユウサクはすぐにOKした。
「グラナダ」へのとりあえずの加入を果たした。

はじめての練習に参加。まだライブもやっていないのに曲が10曲以上あったのには驚いたが、理由はすぐ判った。今までのユウサクの感覚では、メロディーを思い浮かべながらそれにコードを合わせていって進行を作り、詞をつけて各パートのラインを作っていたと、結構手間をかけていたのだが、このバンドはぜんぜん違っていた。

誰かが適当に（自分でかつこいいと思うような）演奏を始める。それに一人が併せる・・・そして全員が併せていって進行をつけながらしばらく続ける・・・でボーカルもしくは他の人間が思いついたメロディーをでたらめな歌詞で歌い出す・・・とまあこんな感じで10～15分で一曲出来てしまふ。ユウサクは初日でこのバンドが気に行ってしまった。

そうした練習を二度三度やっただけでもうライブだという。（大丈夫かいな？）しかも初ライブがライブハウスのイベントで、有名どころ（今までのような高校生バンドの集まりではなく「売れてるバンド」である。）

そんな雰囲気で行った事がないユウサクは緊張を隠す為に、ボーカルに合わせてかなり濃いメイクをしてでた。（ビジュアル系の走り）

受けはよかった。ライブハウス側から次の出演依頼を貰える程には。

高校の卒業式のあと、すぐにアウトレイジの「解散ライブ」が決まった。ユウサクが他のバンドに加入した事に加え、カットシもそのバンドのボーカルにセッション加入したりと忙しかったが、結局は就職組が活動困難・・・という予想から、

「一回、きりをつけようか？」

とカットシがいいだして、アサダもしぶしぶ納得したからだ。ユウサクは正直・・・ほっとした。

グラナダでの活動が楽しくなっていたからである。

進学してからもグラナダの活動は半端ではなかった。毎週ライブ、毎日のように練習。バイトする暇すらない……。しかしスタジオ代や楽器の維持費、アンプも購入、と次から次に金がいる。入学してわずか1カ月でユウサクは落第した。日雇いのバイトなどで休みすぎて出席日数が足りなくなったからだ。

落第を母ヨシコに告げると激怒されたが、父ヒデキには

「今しかでけへん事があるんやったら何にも言わんからやったらええ！せやけど、自分でけつづけよ！自分の人生やからな。」

と静かに言われただけだった。

そして5月のGWに入り、グラナダはイベントに出演する。2デイズの大きなイベントで、しった顔やあこがれている先輩バンド……さまざまな顔ぶれが集まっていた。

自分たちの出番まであと一時間という頃、女性ボーカルのバンドが出演していた。ギターはうまくボーカルはかなりうまかった。しかもパフォーマンスがセクシー……。(よか女やねえ……)

久し振りに女性に目がいったユウサクだった。

く
う
う

「グレナダ」というバンド（後書き）

さあ・・・この女性とはいっただれなんでしょうか？

出逢い（ヨウコ）（前書き）

いよいよ、ユウサクも大人の一步を昇る時が！ライブで出会ったヨウコ。向こうもユウサクを意識している。この出逢いは偶然？必然？

出違い(ヨウコ)

「ええっ・・・知り合いなん?!なんで!?!」

ユウサクは素っ頓狂な声を出した。ドラムのコウシロウが先ほどの女性ボーカルの事を前から知っていたと言う。

「うん・・・俺だけじゃなくてキク(グラナダのボーカル)も知ってるよ!、前のバンドの時に何回かタイバンやってもらったけん!」

「

「へっ・・・そうなんや、あのボーカルの娘、彼氏とか・・・」

「そうそう!ギターの子がなんか年下の彼氏やもんね」

「・・・あ、そう。」

(なーんや、彼氏持ちか・・・)

ここで「グラナダ」の編成紹介(遅い?)

3ピースでボーカルのキクがギターを弾き、ベースのユウサクがボーカル参加、そしてドラムのコウシロウである。当時かなり独特な路線で活動していた。

話が終わると自分たちの出番・・・今日は新曲からのスタートで、6曲だけ。思いっきり飛ばしていける。ユウサクは最初にでて音を出す。

”ブーン、ブブンブーン、・・・ボボボボボボ♪

次に入ったコウシロウがスネアとバスを叩きだす。

”スタンツスタンツ・・・ドンドンドン・・・

ここからはいつものユウサクの時間・・・アドリブでソロを弾きだす。

コウシロウもそれについてきて少しずつリズムを刻みだす。恍惚の時間

キクが出てきてギターを抱える。観客が湧く、アイコンタクトでノールカウントのまま新曲がスタート、さらに客が湧いた、どうやら前列は「グラナダ」のファンで埋まっているようだ。8ビートの地響きが鳴り響く。

ノリが良すぎて、いつもよりテンポよく曲が進み、あっという間に6曲終了した。ステージからおりてビールをあり煙草に火をつける。

”アンコール、アンコール、アンコール、アンコール”

主催者側を見ると、ゼスチャーで「一曲だけ!」と言っている。

啜え煙草のままステージに上がり、ユウサクはわざと残しておいたナンバーを叫ぶ!

「ラプチャーナイト!!」どおつと歓声!!

コウシロウのカウントでスタートまたもや地響きが鳴り続け、頭の中が真っ白になる。・・・瞬く間の30分が終わる。

「今日は気持ちの良かったね・・・えらい盛りあがったやん」

合同の打ち上げの席でキクは上機嫌、コウシロウも笑いながら誰かと喋っている。

ユウサクはというと・・・あの娘を探していた。

しかしその娘のバンドは結構密集地帯にいて入る隙もなさそう・・・ちらっとボーカルの女の子がこちらを向いた気がしたが・・・動きもなかったのであきらめて自分の席に戻る。

「お前、なんそわそわしよーとや？」

キクに聞かれたが、

「うんにゃ・・・なんもない」

そうしか答えられなかった。ユウサクだけを残して、みんな盛りあがり、でき上がって行った。

（そろそろおひらきかな・・・）

そう思い、残ったぬるいビールを飲みほす。すると・・・

「ラブチャーナイツ♪、ラブチャーナイツ♪・・・」と綺麗な声。

振り返ると・・・そう。彼女がいた。

「こんばんは」・・・はじめまして?かなあ・・・」

「ああ、多分、初めて話すとおもつよ。・・・おれユウサク、グラナダの・・・」 「知ってる・・・ベースのユウサクね!あたしヨウコです。よろしく」

「あ、う、うん・・・よろしく」 (照)

まわりに誰もいない事を確認して、ヨウコは語り出した。

「あたしの自惚れじゃなかったら・・・ユウサク、あたしをみてたでしょ?ライブの時も、さつきも・・・」

あまりにストレートなモノいいに、いきなり心臓をわしづかみにされてしまう。

「み、みてない!みてない!」

慌てて言い返すユウサクだが・・・

「ほんと!?...なんだ、残念・・・」

ヨウコにこう言われてあっさり白状してしまう。

「いや・・・思いつきり見とった・・・見惚れとった。」

にこつと笑ったヨウコはこつ言つ。

「よかった・・・あたしも今日、ずっとユウサクに見惚れとったと
「よ

・・・」まじで!!!!!!!!!!!!!!」

酒のせいではなく耳まで赤くなるユウサクだった。

つづく

出逢い（ヨウコ）（後書き）

あと少しで15禁文章に！なんとか綺麗にまとめたいと思っています。

彼女（前書き）

とうとう初体験を迎えるユウサク・・・はたして上手くいくのかどうか？

彼女

ヨウコに出逢ってから一週間が過ぎた。

互いの電話番号だけは交換したものの・・・次の日に電話して少し話しただけだ。”どこかへ出かけようか？”とユウサクは誘ってみるが、

「今忙しいから・・・暇になったら連絡する」

と簡単に断られてしまい（こないだのは何やったんやろうか？）
やっぱりからかわれたのかな？などとあきらめかけていた。

バンド自体も結構忙しく活動していたので、いつまでも「ヨウコ」
の事ばかりを考えている訳にもいかず・・・2週間程たってから電
話がかかってきた。ヨウコからだ。

「ごめんね連絡遅くなって、まだあたしと出かけたい？（笑）」

「もう、かかってこんかと思ひよった・・・いつ逢う？」

「ユウサク・・・うちに遊びにくる？今度の週末とかどう？」

いきなり？！自宅？！

「・・・遊びにつて両親がいるとこへ？いきなり？」

「そついうの苦手？別に泊まりにきてもいいんだけど。」

「いや苦手ではないよ・・・ないけど、今の俺たちって「友達」？そこんとはつきりしてからじゃないと・・・親にあってどんな顔していいかわからんやん・・・」

「そ・・・っか。そうよね、お互いまだなんもしらんもんね・・・」

「デートする？どっか映画とか食事とか・・・」

「あたしさあ・・・回りくどいのがあんまり好きやないっちゃんね。ユウサクはあたしの事どう思っとう？」

「そりゃあ・・・きになるし、こうやって話しよっただけでドキドキする。」

「わかった、じゃあ土日泊まりがけでどっかいこうか!？」

「・・・泊まりって・・・ええ!!・・・いいの?!!!・・・」

ユウサク・・・混乱する。

「嫌なの?・・・」

「い、い、嫌じゃない！全然嫌じゃない！！」

ユウサクは、ふと思い出す。この週末、（自分以外は旅行に行く）

これは「神」のお告げではないだろうか？わざと気持ちを落ち着かせてこういった。

「今週末やつたら・・・うち誰もおらんけど。・・・来る？」

「うん判った！じゃあ、なんか食材買っていつて作るね！」

なんと言う事だ！・・・もしかしたら・・・彼女が出来て、手料理
ごちそうになって！・・・おまけにもしかせんでも・・・う
ひゃあ！

それから4日間妄想にひたりきり寝不足になってしまふユウサクだ
った。

さて週末・・・

まるで幼いころの「遠足」の前日のように眠れず・・・しかも考えられない程朝早く目覚めてしまい、そのまま悶々としているユウサクだったが・・・とりあえずは、部屋の掃除に2時間かけて、ベッドの布団なども干して・・・昼過ぎまで忙しくしていたが、やがてやる事もなくなりそのままリビングで寝入ってしまう。

”ジリリリン、ジリリリン・・・なんか鳴ってる・・・

ああっ！！電話！慌てて起きるともう薄暗い！（しまった！！）

慌てて電話をとると案の定ヨウコだった。

「寝とった？・・・もしかして？」

「うん・・・ごめん、寝てしまっとな」

「もうバス停におるっちゃけど・・・迎えはまだかなと思って、ふふ」

「ごめん！！すぐにいくけん、待ってっ！！」

迎えに行き、ヨウコを招き入れると、もう街灯がつく時間になっていた。

「ほんとにごめん・・・」

「いいよ。そんなに待ってないし（笑）」

さっそく食材を広げてキッチンをみわたして料理の準備をするヨウコだった。手伝おうとしても「よか！男は台所にはいらんで！」と手伝わせてくれなかった。

しばらくしてヨウコが

「暇ならお風呂の用意してよ！あたし結構汗かいたからはやく入りたい」

またも妄想で鼻血が出そうになるユウサクだったが、そういう事を考えてない表情を（どんな顔？）一生懸命つくり・・・風呂を沸かした。

出てきた料理はどれも美味かった。（というか味が判る心理状態ではなかった。）テレビをみたり、ビデオをみたり、とりとめのないおしゃべりをしたりと時間は過ぎていき、

「そろそろお風呂はいるのかな？先にいい？」

運命の時間だ。

それからヨウコとユウサクは順番に風呂に入り、髪の毛を乾かしたヨウコが

「寝ようか？」

と笑った瞬間に我慢できずに抱きしめてキスした。

「またせたね、逃げたりしないから乱暴にしないでね」

「……ここでユウサクは正直に初めてである事を告白した。

「うそ?!……ホントに?」「あたしが初めてでいいの?」

などとユウコが聞いてきたがユウサクはなにもいえずただ

”うんうん”とうなずくばかり。

ベッドに入り、下着姿になり、お互いにむさぼるようにキスを交わした。ブラの上から申し訳なさそうにそーっと胸を触るユウサクに、

「ハアツハアツ……もっとちゃんと触ってえ」

と息も絶え絶えにユウコは愛撫をせがむ。何か吹っ切れたユウサクはユウコの下着をすべて剥ぎ取り、直接乳首を咥えた。

吸ったり、軽く噛んだり、ユウコの喘ぐ声を注意深く聞きながら右手で太ももの間に割って入る。初めて触れる「そこ」はしっとり、というよりもまるで汗だくになっているようで、もうシーツを濡らしていた。

「……触って……」

蚊の鳴くような声でヨウコが哀願する。中指と人差し指でひとしきり暴れた後、意を決してユウサクは足と足のあいだに自ら潜っていた。

以前誰かに

「女のおそこはチーズの匂いがする」

と聞いた事があったが、ヨウコの「それ」はまさにパルメザンチーズの香りがした。とてもいい匂いに感じたユウサクはそのままそこへ顔を近づけ口をつけた。興奮で頭がおかしくなりそうだった。

しばらくヨウコを狂わせた後、ユウサクは自分自信をそこにあてがおうとした。……

「ハアツ……待って、交代してから……ね」

そう言ってヨウコはユウサクを押し倒し、ユウサク自身を口に含む、頭のなかで何かがはじけたような感覚だった。

「じゃあ、最初はあたしがするから……じっとしててね。」

そういつてヨウコ自身がユウサクをゆっくり飲み込んでいく。

（気持ちいい……これがセックスなんや）

ヨウコははじめ、ゆっくり動いていたが、だんだん喘ぎが激しくなり、上下運動が激しい前後運動になりユウサクの太ももまでも濡らしたあとにぐったりと倒れかかってきた。

「出なかったんやね。気持ちよくなかった？」

「うっん、感動するほど気持ち良かった。まだ慣れてないけんかなあ」

「じゃあ・・・ユウサクの好きに動いていいよ。なにしてもいいから」

そう聞いて、まず正常位から、突いたり早く動いたり、ユウコの反応をみながら色々やってみた。ユウコはまた逝った。

続けてバックでとにかく激しくしてみた・・・ユウコはまたもや大量にシーツを濡らしてぐったり・・・

時計を見るとすでに2時間経過していた。（こんなに時間かかるんやろうかセックスって・・・）

その後一時間程でユウコがギブアップ。

どうやらユウサク少年・・・遅漏だったようである。

結局、その場はユウコに口と手を使って逝かせてもらい、二人とも眠った。そして3時間程でめを覚ましたユウサクはまたもユウコを激しいキスで起こして、繋がった。

今度は一時間ほどで二人同時に逝けた。

ユウサクは幸せの絶頂を感じていた。

この幸せがずっと続けばいいのに・・・と思っ
てはいたが、
気がかりな事が一つあったことを思い出し、
寝息を立ててユウサク
の腕で眠っているヨウコの髪を触りながら憂鬱な気分になっていた。

つづく

彼女（後書き）

エロ小説ではありません。描写にはかなり神経を使ったつもりです。なにか意見があれば頂戴したいと思います。評価をお願いします。

なにも知らないで・・・（前書き）

女性を知ってしまったユウサク・・・頭にそれしかなくなり余裕がなくなってしまう。出来たばかりの彼女「ヨウコ」とはうまくいくのでしょうか？

なにも知らないで・・・

ユウサクは眠れぬ夜を過ごしていた。

ヨウコが泊まりに来てからもう一週間・・・
毎日のように電話はしているが、なかなか逢えない・・・

あの日、ユウサクは気になっていた事を聞けないままヨウコと別れた。

ユウサクはコウシロウから聞いていた。ヨウコは「彼氏」がいるらしい事を、なら何故ユウサクとこうなったのか？

（別れたんだよな・・・多分）そう自分に言い聞かせながらも、あの時に聞けなかった自分が情けなく感じ、またはがいくもあった。

おまけに「女の身体」を覚えてしまったのである。眠れるわけがない。

10日程たってから「逢いたい？」・・・とヨウコから電話があった。

”逢いたいに決まっている！”そう答えるとヨウコは満足そうにデートの予定を切り出してきた。

天神（福岡の中心）のちょっと裏通りにあるカフェバーでの待ち合わせ。はいつてはみたものの・・・あきらかにユウサクは浮いている。

まわりはワンレンボディコン（以前説明しましたね。）とセンター分けの DC ブランド男ばかりである・・・ユウサクは真赤な髪をロングに伸ばし、後ろで束ね（この時点でいったい何者？）黒シャツ、黒パンツにベースを抱えている・・・絶対店にはなじめなかった。

待つこと30分・・・やっときたヨウコは、なんと男連れ！そしてユウサクを「友達のユウサク」とその男に紹介した。そして「こっちも友達」・・・とユウサクに紹介。

「ちょっと待つとつてね。」そういうと一旦どこかへ消えて、10分程で戻ってきたヨウコはにっこり笑って

「おまたせ！逢いたかったよ」といった。

それから簡単に食事をとってバーに向かい、一杯ひっかけてから

「あたし今日は泊まれるっちゃん！ホテル行く？」

異存がある訳もなく連れて行かれるようにホテルに入る。

シャワーも浴びさせずにヨウコを押し倒し、唇を吸い服を荒々しく脱がせていく・・・「あせらんで！」とヨウコは言ったが聞く耳ももたなかった。「不安」でしょうがなかったのだ。

身体中にキスをした。汗の匂い、下着をとった後の蒸れた臭いすら愛おしかった。ヨウコもユウサク自身を愛おしく扱ったが、それす

らもまどろっこしく感じたユウサクは、早々とヨウコの脚の間へと自身をのめりこませていった。

ひとしきり汗をかき、愛情や不安をすべてヨウコの中に注ぎ込んだ後、ユウサクは煙草に火をつけて、ヨウコをみて聞いた。

「彼氏って別れたと？それから今日のあの男は誰？」

.....

しばらく黙っていたヨウコは質問には答えず、

「とりあえずお風呂はいろ！」

そういつてユウサクの手を引いていく。

風呂に連れていかれて、身体にシャワーを掛けられて、思いだしたようにユウサクは言った。

「さっきの答えは？・・・」

言い終わる前にヨウコはボディソープでユウサク自身をやさしく洗いだす。・・・そして何も考えられなくなったユウサクへ

「彼氏ってバンドのギターの事？別れたけん今こんな事しよっちゃないの！・・・それから今日の男の子は（友達）って言ったやろ？」

そういつてお湯をかけた後、固くなったものを口に含み、無言で奉仕しだした。一旦口を離してから、ユウサクを上目使いで見ながら

こう言った。

「さっきちゃんとさせてくれなかったけんね。」

（じゃあ、何で俺の事「友達」って？・・・もう・・・いいや、細かい事はどうでも）

答えは決して満足のいくものではなかったが、その場の快楽と激情に負けて「行為」に没頭していく。シャワーにかかりながら、立って壁に手をつかせて後ろから・・・抱き合い唇をむさぼりながら、バスタブに片足を上げさせて前から斜めから・・・

のぼせそうになりながらも、ヨウコが上り詰めるのを見届けてから、ユウサクはヨウコの口で果てた。そのまま”ごくり”と飲みほしたのを見てひどく驚いた。でもこの行為は”愛”がないと出来ない！とヨウコに説明を受けて嬉しくおもしろい、また感動した。

それから

「ユウサクがあたしの彼氏ならあたしを信用してね！」

という言葉信じて、いろんな男と遊びにいくのを黙認していたユウサクだった。なにか疑わしい事がありたずねても、いつも同じようにはぐらかされた。

2ヶ月程たったある日、ヨウコの自宅で家族が留守の時にヨウコを抱いた。しばらくぶり（といっても多分一週間ぐらい）だったので、何度も何度も抱いた。そして暗くなり自分の家に戻ったユウサクはいつものようにヨウコに電話するが、「いません！」と母親に電話を切られる。

何日も連絡がつかなかったので、ヨウコの職場に仕事終わりを見計らって迎えにいった。ヨウコはユウサクを見ても別に嬉しそうでもなく、

「時間ないっちゃん・・・明日また来て」

そう言い放って、急ぎ足で帰って行った。

次の日、同じ時間、ヨウコはユウサクを待っていた。

「とりあえずご飯しよう。」

食事が終わってからヨウコは語り出す。

「最後の日、うちで”した”ちゃん？・・・あれ、母親に聞かれてたみたいやんね・・・やけん、ユウサクからの電話、ぜんぜん繋いでもらえんちゃん。」

しばらく考えてから、ユウサクは（何も判っていない子供なりに）こ
ういった。

「結婚しようよ。」

ヨウコは喜んでくれる！本気でそう思っていた。しかし

「はあっ・・・なんそれ？・・・簡単に言わんでくれる？あたしは仕事しようけど、ユウサク無職やん！　ちよつとは責任もてる発言してくれん？・・・もうがっかりした。」

「話はこれだけやけん・・・帰るね。」

「ちよ、ちよつと待ってよ、これからの事とか何にも話してないやん！」

ユウサクはあわててヨウコをひきとめる。

「・・・これからってなん？もう親に認められてないとよ、付き合ってたって仕方ないやん・・・だいたいプロポーズだって他にもされてるけど、まだ働いてるだけ向こうが”まし”・・・とにかくさあ・・・ユウサクとの事で、他の”友達”とも連絡とりにくくなつとつちやけん、もうとにかく終わろうよ。」

「とりあえず出よう！」

そう言つてユウサクはヨウコを連れて出る。”帰る”というヨウコを半ば強引にホテルまで連れて行き、部屋に入って荒々しく唇を吸った。

しばらくそうしているとヨウコがおとなしくなったので手をはなす。

「…………どうしたと？するっちゃろ？……はやく済ませて出よう！これで納得いくなら別にいいけん。」

「どういう意味？」

「これで最後にしてくれるなら”して”いいよ。」

ショックだった。熱くなりかけていた身体は急速に冷え、茫然とした。

「そんなに別れたいと？」

「うん……今は別れたい。」

何とも思いとどまらせようと必死でヨウコを説得するが、こないだ抱いたヨウコとは別人のようで、未練のかけらも見当たらない。

そのまま、何もしないままユウサクとヨウコはホテルから出た。
出口で

「じゃあね」とキスをしてヨウコは行った。振り返りもしなかった。

それから二週間バンドの練習も休んだ。

・・・で二週間ぶりに練習に出たユウサクに、コウシロウが申し訳なさそうに声をかけた。

「ヨウコ・・・より戻したらしいよ（元彼と）よかったやん、あんな女とは付き合わんがいいよ！」

慰められて余計みじめになったが、

「うん、そうやね・・・せいせいした。」

と強かった。練習が終わり自宅に帰ってから一人泣いた。

本当の意味での失恋である。ユウサク19才の夏の日であった。

つづく

DCブランド（デザイナーズブランドで、この当時はこれしか服がない！と言う程みんな着てました。）

なにも知らないで・・・（後書き）

結局、失恋・・・これを機にユウサクは女性に対して夢を見なくなります。

マネージャーのヤエコ（前書き）

失恋の痛手を抱え、ライブもうまくいかず、バンド自体がピンチに
！そんなときマネージャーのヤエコが食事に行こうという・・・
どうするコウサク！！

マネージャーのヤエコ

ユウサクは自分では立ち直ったつもりだった。

あの別れから2ヶ月が過ぎていたが、まわりはそうは見えなかったらしい・・・ボーカルのキクが女の子を紹介してくれたり、コウシロウはコンパのようなものにユウサクを誘ってくれたり、ずいぶんと気を使ってくれていたが・・・ユウサクはまだそんな気にはなれなかった。心の傷は本人が思うより深かったようだ。

ユウサク自身はいままであまりやらなかった「曲づくり」をやったり、基本練習をしだしたりと比較的前向きな生活は送っていたのだが・・・

バンド自体の活動は停滞していた。と言ってもいいだろう・・・目立ったイベントに参加要請はなく、ソロライブも外してしまい、ライブハウスからの信頼もなくなってしまうたりしていた。
(もちろんユウサクのモチベーションだけが理由ではないのだが)

ある日、マネージャーのヤエコがライブ企画を持ち込んできた。新しいライブハウスでの「ソロ」だった。

以前オープニングイベントで観客が湧いたのをオーナーが覚えていたらしい・・・ただし、チケットを捌かねばギャラがでない。

悪い条件ではなかったのですがOKした。暇なのはユウサクだけだったので、打ち合わせにヤエコと二人で行く事になった。

いきの電車の中・・・

「ユウサクさん・・・最近、どうなってるんですか?!」

「なにが?」

「全然モチベーション低いし、新曲もここ3回のライブで1曲だけ。せつかくファンが付いてきたのに、もったいないですよ。」

「そげな事言われても・・・出来んもんは出来んし・・・」

「嘘!! ユウサクさんがやる気がないって2人ともこぼしてましたよ」

（はーん・・・この話はヤエコにさす為に俺と二人で打ち合わせやったんやね・・・しゃーしかあ・・・）

「ああ・・・まあ・・・でも最近の調子上がってきとーけん! もう大丈夫!」

「ふーん・・・ならいいんですけど・・・（ヨウコ）さんってそんなにいい女なんですか? 忘れられない程なんですか?」

「ああ?・・・まあね、よか女ではあったね。」

「・・・」

「なんや? 質問しといてから反応なしっちゃ、どういう・・・」
「もういいです! その話は!」

（なんか、いまいちこの子は判らんね・・・なんがいたいっちゃろうか・・・）

そんな話をしながらライブハウスにつき、打ち合わせをするもの。
・

この当時はあまり自分の思っていることを表現するのが下手なユウサクは終始黙っていて、結局マネージャーのヤエコがほとんどの打ち合わせを終えてしまった。

帰りはお互い方向が違つ為、天神で別れる事になるのだが、ヤエコが言う。

「食事して帰りませんか？」

「ああ、よかよ！なんが食いたいと？」

「何が？つていうか・・・行きたいところがあるんです。」

「どこ？」

「いいから行きましょー！」

言われるがままに付いていくと・・・

「どこ？！^{ともしび}灯に來たかつたと？」

「はい」

「はいっ……で、ここっでお前……」

「いいから一緒に来て下さい！」

そのまま強引に連れていかれた場所「灯」は、現在の「昭和」があるビルの地下にある喫茶店で、いつか見た「ザ・キッズ」の元ベーストの「千葉」さんが経営していて、極端に照明が暗くしており、ムーディーな空間でカップルご用達の場所だったのである。

（まあ、食いもんもあるけど……またなんでこんな場所に）

しばらくするとその千葉さんがオーダーを取りに来た。

「おお、ユウサクやんか、なんやお前……また若い彼女ばつれとーやん！うわ！高校生か？！！犯罪やる！」

「なんがですか！こげんな小娘が彼女な訳ないでしょうもん！」

「ええ？そうなん？……君、本当に彼女じゃないん？」

ヤエコにむかって千葉さんが聞くと……

「ええ！違います！ユウサクさんは私みたいな（小娘）は嫌いみたいですから」

と……ちょっと怒ってる風に聞こえたが（暗くてよくわからなかった……）

それから、食べ終わって店をでるまでヤエコは口をきかなかった。

「なんや・・・お前なんむくれとーとや？」

「・・・・・・・・」

「なんか言えよ！お前のリクエストで灯にいったのに、だまーってからくさ・・・」

「別になんでもありません。今日はありがとうございました。おやすみなさい」

「おい・・・おいつて！・・・」

客観的にみて、これ程「女心」が判らない鈍感な人間もめずらしいものである。

それから二週間して、ライブはなんとか成功。その時たまたま見に来ていた、唐津出身のバンド「ダダチャイルド」のボーカルとギターと意気投合して、近場ではあるが、佐賀の唐津にツアーが決定した。

後で判った事だが・・・天神にビブレがあり、その7階に額縁の専門店があった。その店長さんと、キクやユウサクは仲良くしていたのだが、その店長さんが実は唐津の人で・・・ダダチャイルドや、唐津のライブハウスのオーナーに以前から売り込んでくれていたらしい。そしてそれも、ヤエコの影の活躍によるところが大きかった！というのをユウサクはずっと後になって聞いた。

つづく

マネージャーのヤエコ（後書き）

まったく鈍感というのはある種「罪」です。この頃気配り上手だったら・・・まあ「もし」の話はしても仕方ありませんね（笑）

夜空（前書き）

本人が気付かぬうちにマネージャーのヤエコに惚れられているユウサク・・・果たして2人はどうなってしまふのか？！

夜空

今日はいよいよ唐津に行く日である。

夕方までにバスで唐津に入り、夜ステージ（多分深夜）そして、ダチャイルドが普段、合宿でつかっている部屋に泊めてもらい、朝から夕方まで自由時間・・・夕方もう一度ステージに上がり、帰りはJRと地下鉄を乗り継いで帰る。（かなりお気楽スケジュール）

マネージャーとコウシロウは「行きも地下鉄がいい」と最後までこねていたが・・・結局

「バスやないと煙草が吸えんめーもん！！」

というキクとユウサクが我ままを通してバスになった。（当時、確か昭和バスは中長距離なら喫煙OKのバスがありました。）帰りは時間の都合上地下鉄しかなかったが。

ついですぐにライブハウスに出向き挨拶をした。

「おたくたちの話は聞いとるよ、グラムロックみたいなカッコでエコバニみたいな音を出すらしいね。」

「いやあ・・・そげんいいもんやないと思いますけど、がんばりますのでよろしくお願いします。」

「ああ、わかった。がんばんなさい！地元のバンドも博多から来たって聞いて、刺激受けてるみたいだから。」

オーナーはかなり温和な雰囲気な人でひと当たりが良かった。

しかし、話の中で出てきた「地元のバンド」というのが気になる。以前パンクと一緒にライブをする事が多くて、よくステージ上に上がってきて襲われそうになった事があるだけに、緊張感が走る。

その時ダダチャイルドのギター「ナジオ」が笑いながら説明する。

「田舎もんが多いから博多がなんか？！みたいに言ってる奴らもいるけど、概歓迎ムードだから大丈夫！（笑）」

それを聞いて少し安心したユウサクだった。

オーナーの話は続く。

「せっかく来てくれたから盛り上げよう！！って連中も多いからね、安心して演奏してくれていいよ！、じつは今日は唐津に BB キングが来てて同じ時間にライブなんだけど・・・地元バンドの連中はみんなこっちに来る事になってるから。」

（この当時、唐津のバンドはほとんどがブルースを主体にしたロックバンドが多かったので、ホントは「ブルースの神様」BBキングのライブに行きたくてしかたなかった筈だが・・・唐津のバンドの熱さに感動するユウサク達だった。）

ステージが結構遅い時間（トリ前）なので、ナジオが街を案内する！と言いだしたが、ユウサクは実はバスに酔っていた。

”遠慮しとく”と告げると、キクとコウシロウ、そして額縁屋の店長（女性）はさっさと出かけた。

ひとりは暇なのでごろんと横になっていると、

「大丈夫ですか？」

とヤエコがアイスを持ってきた。

「おおサンキュウ！・・・いかんやつたん？」

「はい、ユウサクさんが具合が悪いつて聞いたんで・・・」

「わかったねえ・・・遊びに行ってもよかったのに」

「残りたかったんです！！」

心なしかヤエコの顔が赤くなっている。

・・・

・・・??

・・・！！！！

もしかして・・・こいつ、俺の事？

今頃気がつく馬鹿な男がここにいた。

「え、えーっと・・・いや、ほら・・・あの・・・さあ」

何を聞いたらいいのか何をはなしたらいいのか、わからない。

「あの！！あたし、本読んでますから・・・寝てて下さい！入り時間の前にちゃんと起こしますから！！」

「あ、ああ・・・うん・・・じゃあよろしく。」

ホントに二時間寝てしまう。

いよいよ出番・・・メイクとチューニングと曲順の打ち合わせを終え、落ち着かずにベースをずっと弾いていた。こんなに緊張するのは初めてだった。（やっぱ、よそもんやけん相当気合の入った音ばださんとね・・・）

とっさに思いつき、曲順を変える。いつもはラストにやる曲をしようばなに持ってきた。バシッと決めてやろう！そう思った。

カウントが入る、一斉に演奏が！！！！

・・・はじまらない。（あれ、ベースの音がでてない）

確認すると一回音だしてから、バックステージに下がった時には入っていた筈のシールドが抜けていた。（証拠はないが、誰かの意図を感じた。）

「おいおい！！（笑）しつかりせーよ、こら！！」

「おおなんしょーか博多じゃそれが受けるんか？」

とたんにヤジが飛び交う。

「おまえら！静かにしろ！」ナジオの声が飛ぶ。

「でたでた！！博多びいきのナジオが！！お前は博多の人間か！博多がそがんえらかつかあ！！」ヤジは一人を中心にさらに広がる・

（パッチーン）

「あんたたち！！情けなくないと！！いいかげんにしーよ！！せっかくきてくれるのに！！」

額縁屋のねーちゃんがヤジを飛ばしていた男の顔を思いつきり貼り飛ばしていた。やられた男はねーちゃんを殴りそうな勢いだつたが、ナジオが間に入ったのと、ねーちゃんが泣き出した事で事態はおさまったようだ。（ねーちゃんナイス！）

キクが絶妙のMCを入れる。

「なんか騒ぎのあったことあけど・・・そろそろ始めてよかですか？」

どつと雰囲気が柔らかくなったところでユウサクはコウシロウに目くばせして、もう一度カウントをとらせた！！

結果でいえばライブは大成功。トリのダダチャイルドがさらに盛り上げ、アンコールの時にグラナダメンバーを呼びセッションをした。すでに酒が入っていたためにふらふらのユウサクだったが、楽しい宴は深夜まで続いた。

ユウサクは酔いを覚まそうと、海の傍に来ていた（漁船があったから波止場かな？）

（星が綺麗かねえ）

「ほんと！星綺麗ですね。」

「うわーっ・・・びっくりした。お前いつからおったん？」

いつのまにかヤエコがすぐ傍に座っていた。

「気がつかなかったんですか？ほんとに・・・鈍いですよね」

「なんか棘があるね。」

.....

沈黙のあと、ヤエコがユウサクにもたれかかってきた。

ユウサクもなにも言わない。そのまま静かにずーっと星を2人で眺めていた。

ヤエコが急に口を開く。

「好きですよ。知ってますか？」

「うーん・・・今は判る。」

ユウサクはそおつとヤエコにキスをした。

つづく

エコバニ（エコアンドバーニーズ80年代に活躍したバンド）
グラムロック（若き日のデビット・ボウイそのもの）

夜空（後書き）

さあ・・・ムードはあるんですが・・・この後どんどん悪い奴にな
っていく・・・

悪い男（前書き）

ヤエコの気持ちが判ったユウサク・・・しかし付き合うという気持ちが固まらないまま時間が過ぎていく。そこでヤエコは思いもよらぬ攻撃にでる。

悪い男

「ユウサク・・・なんかこの前唐津いつてからヤエコが舞いあがったってん・・・お前なんか関係ある？」

唐突にキクに聞かれた。もちろん関係あるのだが、嘘をつく。

「お前ねえ・・・俺はロリコンやないつつえ、ヤエコはないやろ。ヤエコは！」

「・・・・・・・・・・ならいいっちゃけど、ヤエコだけはだめぜ！」

「なんで？・・・なんか理由がある？」

「駄目なもんは駄目たい！。マネージャーとファンにはてはだしやんな。」

それ以上は深く聞かなかった。（聞いたらぼろが出そうだった。）

実際・・・唐津でヤエコの気持ちを聞いて、（キス）して・・・それだけだった。”付き合う”といった話もしてないし、二人で出かける事もなかった。

怖かったのである。唐津の夜、ヤエコが言った言葉

「あたし・・・経験ないんです。彼氏つくった事ないし」

普通は喜ぶのだろうか？

ユウサクは女性に処女や貞操の強さは求めていなかった。ただ「愛」そして「母性」を求めていたのかもしれない。ヤエコの気持ちを知った時はかなり嬉しかったし、自分も好きになれそうな気がしていた。

だが、「処女」という事実を知ってしまい存在が（重く）なってしまった。（俺はただセックスがしたいだけなんやろうか？）

それからヤエコとは進展がないまま1カ月が過ぎた。

「ユウサク、ヤエコさんから電話！！」

母に起こされる。家族で父ヒデキの実家がある三重まで帰る日である。

子供の頃からの習慣でユウサクは家族旅行はだいたい留守番をするのでこの日も昼過ぎまで寝ようと思っていたのに・・・

「おはよう・・・なん？」

「おはようございます。・・・あの、今日遊びに伺ってもいいですか？」

「いいけど、なんしにくるん？」

「・・・別に用事はないんですけど、ユウサクさん・・・全然さそつてくれないし・・・」

「家じゃなくてもよかる？天神にでもでしょうか？」

「家がいいです。」

「なんで？」

「だって見てみたいし・・・迷惑ですか？」

（迷惑じゃないし・・・むしろ好都合やけど、いやいや・・・やっぱり処女はきが重い。上手にできるか判らんし・・・付き合うかどうか決めてないし）

「・・・じゃあさ、一人でくるな！・・・ね！誰か、そうお前のバンドの誰かばいっしょに連れてきたらいいやん。」

（ヤエコはマネージャーのかたわら自分のバンドも持っていて、メンバーは全員よく知っているし、ユウサク達を尊敬していてくれた。

）

「・・・じゃあ、誘ってみますね・・・」

二時間後・・・電話が鳴る。

「あの・・・着きました。」

「うん、だれと来た？」

「・・・ひとりで・・・」

「じゃあ・・・出かけようか・・・」

「なんで一人じゃだめなんですか？」

「・・・なんでって・・・俺も男やし、お前の事は好きやけど、大事にしたいって思ってる・・・やけん二人つきりになるのは・・・手を出さない自身がない。」

「とにかくあげて下さい！」

「お前、今の話ちゃんと聞いた？」

結局なし崩しに上がりこんできたヤエコだった。

部屋のあちこち、楽器やライブのテープなどさんざんいじくりまわすとともに、急に隣に座ってきた。

「ユウサクさん……あたしの事どう思ってますか？」

「どうって……妹？」

「えー……ユウサクさんは妹にキスするんですか?!」

（そこを突かれると痛い……かなり）

「いや……あの時は、その確かに……」

ふとヤエコを見ると眼をうるませてこっちを見上げている。

キスして……結局カーテンを閉めるユウサクであった。

ほとんど女性経験がないユウサクと処女であるヤエコ……

大変な作業だった。

まず服を脱がそうと思ってもどたんばで嫌がる。でもやめようとする

「辞めないで」

その繰り返しで1、2時間が経過。

やっとお互いが裸になっても、羞恥心と怖さで固くなってしまいかなか事が進まない。かなり気長に接していた（つもり）のユウサクもだんだんいらしてくる。（ますます固くなるヤエコ）

経験を積みめば、こんな時こそやさしく接して、耳元で愛の言葉をささやけば少しはリラックスできるのに・・・そんな余裕はユウサクにはなかった。脚のあいだに右手をすべりこませて強引な愛撫、ヤエコの反応をみながら指がしめってきたところでゆっくり指をヤエコの中に侵入させた。反応がない、痛くはないようだ。しばらくキスをしながらそうした愛撫を繰り返し、抵抗するヤエコの脚を開きゆっくり進んでいった。

「いたいいたい・・・いたいです。」

「最初やけん仕方ないやん。」

「でも痛いです。やっぱりやめときます。」

「もう俺がやめられん！我慢して。」

「・・・・・・・・はい。」

痛がるヤエコをよそにユウサクはストロークを大きく、ピッチもはやくなり、（何ヶ月ぶりかの女体に興奮したのか）ものの20分程で頂上に上りつめた。ヨウコの時のように口で出そうとしたが、まだ男性自身を含んだ事もないヤエコにすれば、いきなりそそり立ったものが顔の前にきたものだからとつさに顔をそむけた。あえなくユウサクはヤエコの顔から髪の毛にかけて大量にぶちまけてしまう。

「え、え、えゝっ・・・・・・・・こんなにいっぱいでてくるんですか？」

かなり汚してしまったので、そのまま風呂に連れて行き、放心状態のヤエコの身体を洗ってやった。

こうして、ヤエコの大事な初体験を「痛い」だけの思い出にしまったユウサクだった。

「あたし・・・これでユウサクさんの彼女ですか？」

「う・・・じつは、キクにお前に手をだすなっていわれとったんよねえ」

「ふーん・・・で、どうするんですか？」

「しばらく、みんなに黙ってとってくれん？時期みてはなすけん。」

「いやです。」

「いや・・・やけん、しばらくって！」

「いつまでですか？いつ彼女っていつてくれるんですか？」

「・・・まだわからん。」

「・・・あたし帰ります。！」

見送る暇も与えずヤエコはそのままでていった。

次の日キクから電話がある。

「ちょっと天神まで出て来い！話がある。」

（早いなあ・・・伝わるの、）

覚悟を決めて天神にでて、待ち合わせ場所の額縁屋までいくと、店長のねーちゃんがいた。

「おつかれ！」

「・・・・・・・・」

聞こえてないかのように無視である。

「おつかれって！」

「うるさい！聞こえてる！でももうあんたとは喋りたくない！」

「なんやそれ！意味がわからん！」

「自分の胸にてを当てて考えてん！・・・ヤエコちゃん泣かせたろ？」

なにも言えなかった。どうやらメンバーに知れたのもこの女が原因か？

しばらくしてキクがきた。

2人で喫茶店に入る。

「お前・・・言っとつたる？ヤエコにかまうなって。」

「・・・・・・・・すまん。」

「すまんじゃないったい、あいつ額縁屋に全部ぶちまけてから、俺にも電話してきて、”お前ユウサクと付き合いたい”ってゆうたけんが、だめたいて言ったら、じゃあマネージャー辞めます。って」

「あちゃー・・・そうきたか。」

「お前はとうしたいとや、俺はバンドの決めごととして、関係者と付き合うのは認められん！やけんヤエコと付き合うならお前かヤエコがやめないかんぜ！」

えらい騒ぎになってしまった。

コウシロウも合流したが、基本的にはキクと同意見。ユウサクは今バンドを抜けるつもりなど全くなかったので、

「俺は辞めん・・・けどヤエコが抜けてライブ調整とか困るっちゃない？」

「それはどげんだっちゃいいんやけど・・・ヤエコはやっぱりやめとったほうがよかつちやないや？一回やっただけでこの騒ぎじえ、これからどんなに面倒が起きるかわかったもんやない。」

「うん・・・まあ考える。」

それから一人になってヤエコに連絡した。

「お前ね・・・なんでこんな大騒ぎにすると?」

「だって・・・ユウサクさんがはつきりしないから。」

「やけんって他にやりようがあるーもん!!ばか」

「だって・・・だって・・・」

「キクからはどっちか辞めれって言われたけど、俺は辞めんてゆーたぜ」

「はい・・・私が辞めます。だからちゃんと付き合って下さい。」

「その事やけど・・・考えさせて。」

「なんでですか?問題はなくなっただじゃないですか!!」

「なくなっただ代わりに新たな問題が発生しとーやないか!お前が原因で!そこんとこどう考えとん?!ああっ!?お前が抜けて、額縁屋のねーちゃんぶち切れて、唐津とのパイプ無くなっただし、俺メンバーに顔向けできんやん。」

「額縁屋さんには前から相談してたんです。ユウサクサンの事・・・でも(あれはやめときなさい!)っていわれてましたけど。」

「どう伝えたかはこの際聞かん・・・けど今度の件でお前に対する信頼っていうか、少し変わったし、性格も判ってなかったごたあ。やけん、しばらくそつとしといてくれ。頼む。」

「・・・・・・判りました。ごめんなさい。」

ヤエコは泣きながら電話を切った。

ヤエコはマネージャーを降りた。しかし最後に結構な数のライブとイベントを用意してくれていたので、グラナダの活動はかなり忙しかった。

ある日のライブ、かなり先輩のバンドのタイバンでの出演、そのバンドはベーシストがかなり独特なテクニシャンで、多分ユウサクのスタイルなら勉強になるから、とヤエコが進めていたバンドだった。

たしかにうまい！面白いしエフェクターのかけ方など共通点多かった。ドラムもかなりカッコいい叩き方でちょっと憧れた。

打ち上げで、そのベーシストを捕まえて色々話をした。向こうもグラナダの演奏を見てくれたようで、

「お前結構おもしろい・・・多分独学やろ？でも今のうちに基本はちゃんとやっというたほうがいいぜ！あとあと損はないけん。」

などと、意見もくれた。収穫のあるライブだった。

その先輩バンドのライブ中、メガネをした女の子が前列にいたが、打ち上げに参加しているので（誰かの連れかな？）と思っていると・・・

「こんにちは！」

と話しかけてきた。（あれ？なんか感じが違う）とおもっていると、メガネがない！メガネをはずすとおにゃんこの国生さゆりに似ている！！

（うわー・・・綺麗な女の子やねえ）

「ああこんばんは、だれかと知り合い？」

と答えると、キクもコウシロウも知っていると。 （またバンド関係か・・・）
少し話してから、自分の席にもどり、またメンバーや他のバンドと交流を深めた。

まあ、この時はそれだけの出会いだった。

つづく

悪い男（後書き）

はつきりしない男ユウサクはだらしなく生活していつてます。けじめをつけずに新しい出会いに情熱を傾ける・・・だめな性格が如実に表に出てきてしまうのもこの頃からです。

若さって・・・(前書き)

新たな出会いに目移りして、もういままでの事を忘れてしまったユウサクです。迂闊さがトラブルを招くともしらずに・・・

若さって・・・

ユウサクはかなり疲れていた。

このところ、ライブやイベント続きで、自宅に帰れない事もしばしばあり、よくキクやコウシロウの家に泊まっていた。

（同じ高校出身なのだが、ユウサクだけ家が離れていた。）

それも、今日のライブでとりあえず終わる。しかも今日は「徒楽夢」（ドラム）だ。観客の乗りや、チケットの売れ行き次第では東京、大阪、広島あたりへのツアーも後押ししてくれる。この日の為に新曲もかなり仕上げた。気合が入っていた。タイバンは偶然にも先日イベントでいろいろな意見をくれたあの先輩バンドだった。

「今日がんばろうな！うちは前にツアー組んでもらったけん、お前たちもチャンスを活かせよ！」

「ありがとうございます。」

いつも、ドラックなど黒い噂が絶えないバンドだが、その人だけは話易かった。最近知った事だが、あのカッコいいドラマーとは兄弟らしい。

かなり強面な弟とはひと当たりが全然違う。ユウサクはそのドラマ―は苦手で、話しかけられた事もなかった。

グラナダは「トリ」だった。ファンの子達がそれなりに盛り上げてくれたものの、評価はいまいちだったらしい。チケットもヤエコが抜けてからは売れ行きもちらつきがあり、今回はあまり売れていなかった。

力をいれた新曲構成も、ファンからすれば逆に乗りにくかったのかもしれない……

落ち込んでいたが、打ち上げでしょげていても仕方がない。ユウサクはかなりポジティブ……というか脳天気なほうだった。

「まあ……こんなもんやろ！そのうちいい事あるたい！」

ほかの2人を知り目にひとり打ち上げで元気にふるまっていた。

「こんばんはユウサクくん！」

「おお……きとったんね」

そうあの国生似の美少女である。彼女はユウコといった。

「残念やったねえ……今日、マスター（徒楽夢の）の評価低かったって、かつこよかったのにねえ……あたしは好きよ、ああいうライブ」

なにかと詳しい事に疑問を感じながらも、ユウサクはユウコと話し込んだ。ユウサクも知らないような事情まで知っているユウコとの会話は楽しかった。気がつけば、ユウコとの事やヤエコにしまった事まで話してしまっていた。ユウサクにとって、とても心地いい相手だったのである。

途中でキクとコウシロウ、そしてキクの彼女のユカちゃんが合流してきた。

「お、仲よさげやんか、ユウコ、いつのまにユウサクちゃんと仲良しになったと?」

「こないだから・・・前のイベントでも少し話したっちゃんね! ユウサクくん!」

どうやらユカちゃんと顔なじみのようだ。

「あれ? 不思議な顔しとる(笑) ユウコとアタシはおんなじ高校いきよつとよ!」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・??

「・・・・・・・・てことは・・・・・・・・ユウコちゃん高校生なん?」

「えゝゝいくつと思ひよつたと?!」

「ちょっと年上かなあ・・・って思ひよつた(笑)」

「うわっしつれいかあ!」

そのまま、久し振りに酔うまで飲んだ。

しばらくみんなでのんだ後、ユウコが耳うちしてきた。

「ユウサクくん・・・今寂しいっちゃろ?」

「・・・なんで?」

「あたしとこのまま打ち上げ抜ける?」

「・・・で・・・どうすると?」

「ユウサクくんの好きにしていよいよ!あたしも面白くない事があつて・・・ちよつと気晴らししたい感じやん。」

そう聞くと・・・あきらかに自分好みの美少女をみながらヤマシイ考えが浮かぶユウサクだったが、まさかいきなりそんな事もいえず、黙っていた。

「あゝ・・・やらしい事かんがえたら?今?」

「いや・・・考えてない。」

「いいや絶対考えとつた!」

「考えてないって・・・」

「・・・いいよ!ユウサクくんとなら・・・行こう!」

そういつて、ユウコはユウサクの手をひいて歓楽街へ歩いて行った。思わぬ展開にドキドキしながらも顔には出さず、ゆっくりと後をついていくユウサクだった。

あっという間にホテルの一室・・・

年下のユウコだったが・・・経験ははるかにユウサクよりも上！完全にリードされながらのスタート。キスからはじまり、服の上から愛撫、一枚一枚脱がせていき・・・ユウサクも脱がされて、先に奉仕を受けてしまう。動きは単調だがはじめての相手にそんな事をされているシチュエーションでもう登り切りそうになった。

上からまたがってきたユウコを止めて、自分のペースに戻す。脚の間に顔をちかずけると・・・また違ったチーズの香り。興奮しすぎで頭の中が真っ白になる。

「ああ・・・そのまま、そのまま続けて・・・い、いきそう・・・」
ユウコの大事な部分を味わいながら、「びくっびくっ」と頭を締め付けられた。

それでも続けていたが、

「もう・・・入れて！お願い」

リクエストに応じていきなり奥深くまで進みいった。

5分としないうちにユウコはまた逝った。ユウサクが果てるまで、何度も何度も・・・

二度目にユウサクが終わる時、ユウコはコンドームを剥ぎ取り、口で逝くように懇願する。そして（美味しそうに）味わって飲み下した。

（これって・・・絶対美味しくないよね・・・臭いきついし。）
ユウサクは驚きながらも喜んだ。（どうやらヨウコによって性癖が生じたようである。）

シャワーを浴びて、風呂場でもひとしきり愛し合った後、ベッドでまったりしながら、またしてもここまで来てユウサクは聞いてみた。

「ユウコちゃん・・・彼氏とか、おらんとよねえ・・・」

「いたよ・・・今日まで。」

「・・・ふーん・・・俺が知ってる人？」

「うん」

「ええっ・・・誰？」

「川口くん。」

（例の先輩バンドの兄弟の苗字だが・・・）

「。。。。の?！」

「うん・・・そう。」

「どっち?（ベースかドラム）」

「弟（ユウサクが苦手なドラム）」

「。。。。へへ・・・そうなんや。」

「うん。」

「今日別れたん?なんで?」

「浮気ばかりするっちゃん。もう5回目。さすがに頭きたけん一方的にわかれるっていつてそのままユウサクくんのところにきたと」

なにやら大変なトラブルに巻き込まれそうなユウサクである。

U
U
U
U

若さって・・・（後書き）

さあ・・・大変です。どうやってトラブルを切りぬけるのか？ユウサクの本領発揮！

次から次に（前書き）

ユウコと関係を持ったユウサク・・・ヤエコの事をうやむやにしたままユウコと付き合ってしまう。それを歓迎するものとそうでないもの・・・

次から次に

ユウコとホテルに行ってから数日後、キクとユカちゃん、そしてユウサクとユウコの四人で食事に行った。

「二人が付き合ったらこうやって四人であそべるね！もう付き合いよう？」

おそらく事情を知っているくせにユカちゃんはそう聞いてきた。

ユウサクは即答できず、ユウコを見る。あの夜以来初めて会ったし、ましてや「元彼」の事など、電話でも聞いていない。

「うん！こないだから付き合いよるゝ、ヤマグチくんにもユウサクくんの世話してるし。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

（今それとなく・・・やっかいな事を口にしたよな？）

「ねえ！ユウサクくん♪」

「ねえって・・・別れ話はキチンと済んだと？俺なんも聞いてないっちゃけど・・・」

「済むも済まんもなかるうもん？あたしはユウサクくんの彼女にな

「たつちゃん。」

「向こうはなんて言いよると?」

「一回ユウサクさんと話したいって言いよったけど『関係なからうもん! うつとおしい!』って言ってやったらだまつとった。」

「ふ、ふーん……」

とまあ、そんなこんなでユウサクに彼女が出来た。

それまで黙って話を聞いていたキクだったが

「ユウコちゃんはけりつけたけん……お前もはつきりしとけよ。」

「……ああ、ヤエコの事?」

「おお! 他になかうもん。そろそろくるけんが、話ばしてやれ」

「そろそろ? ここに?」

「早い事けじめつけてやらんとヤエコもどうしていいかわからんよ
うになつとつぜ?」

30分程してヤエコが来た。ユウサクのとなりにいるユウコをみて、敵対心と悲壮感の混じったような顔をした。

ユウサクはすぐにユウコに断り、席を立った。

「久しぶり」

「……………本当ですか？彼女作ってたって。」

「……………うん。まあそうなった。」

「さっきの人、……………のヤマグチさんの彼女じゃないですか？！なんでわざわざ人の彼女とったりするんですか？ユウサクさんはあたしの事は忘れてたんですか？」

「忘れてはない！ただ、この前言ったごと、お前と付き合っていく気持ちにはなれんかった……………それだけ。」

「どうして……………今頃面と向ってそんな事いえるんですか？！ひどいです！！あたし……………あたし……………」

ヤエコはボロボロ涙をこぼしだした。

「泣くな……………泣くなって！」

早くも気持ちが揺らぐユウサクだったが、少し考えてから話し出す。

「俺にもよくわからん・・・お前の事好きって思ったけん抱いた。でもその後の事で気持ちが変わった・・・やっぱり妹みたいに思っと思ったんかもしれん、いろいろ悩ませて悪いと思ってる。」

「じゃあ！！悪いと思ってるなら付き合ってください！責任とって下さい。」

さらに号泣しながらヤエコは迫る。ユウサクのを引いて

「セックスが好きな女がいいならがんばります！なんでもしますから！！今からホテルにいてもいいです！！・・・だから・・・」

「もう・・・やめとけ！！俺を恨んでもらっていいけん・・・そんな事いうな！もう・・・帰れ。」

30～40分にわたりなだめたりすかしたり怒ったり・・・結局ヤエコは納得しないまま（そして泣きながら）帰って行った。

かなり待たせた割にはユウコは怒っていなかった。ただ一言

「終わった？」

「うん。」

それだけで満足したようだった。

この一連の騒ぎで（ヤエコがあちこちでどう伝えたかはわからないが）

「グラナダのユウサクは女癖が悪い。みんな気をつける」と「かなり悪いレッテル」を貼られてしまうユウサクであった。

付き合いだしてから2人は頻繁に逢っていた。お互いの家を行き来し、ホテルにもいった。最初のセックスでユウコはユウサクがかなり（好きもの）である事を見抜いていて、逢うたびに必ず求めるユウサクを嫌がりもせず受け止めていた。ユウサクのテクニクの基本は、ユウコから教わったものだった。ムードの作り方、指使い、腰使い、舌使い、いろんな体位、シチュエーションなど・・・ありとあらゆる事を学んでいた。

付き合いだして2ヶ月が経った頃、夜、ユウコを自宅まで送り届ける為にユウコの最寄駅で一緒に降りた。改札を抜け、二人で駅からでると・・・

「今帰り？ちよつとよかった。ユウコに話があったっちゃん。」

ユウコの元彼であるヤマグチが待っていた。

つづく

次から次に（後書き）

さあ・・・出てきてしまいました。いわゆるボスキャラです。少年
ユウサク、ボス退治ができるのかどうか？

絶体絶命（前書き）

目の前にはヤマグチが！絶対絶命なのです。

絶体絶命

第十二話・・・・・・・・・・・・・・・・【絶体絶命】

「あたしは・・・用事とかないっちゃけど？・・・なに？」

そう2人で駅から降り立つと、ユウコの元彼ヤマグチが待っていた。

へらへらしているヤマグチをみて（ドラッグかな？なんか様子がへんや・・・焦点もあつとらんみたいやし。）

とりあえず表情には出さず、警戒してユウコの腰にてを回した。

原チャにまたがり、ユウサク達の歩くスピードに合わせつつ並走を続けるヤマグチ・・・（うつとおしいね・・・用事があるならはよ済ませたらいいのに。）ユウサクはそう思いつつも、もめ事は避けたいと考えていたので、なにも言わずに歩いていた。（かなりのストレスは感じていたのだが・・・）

「やけん！！なんの用？なんで付いて来ると？！」

最初にしびれをきらしたのはユウコだった。

「そげん怒らんでもいいやん・・・そいつ・・・ユウサクやったかいな？そいつが帰ったら言うけん。・・・おいつお前！ユウサク！、ユウコともうしたっちゃる？・・・ちゃんと満足させきーとか？？そいつうまかるうが！？俺が仕込んだけんね！どげんしたら一番感じるか聞きたいや？？・・・教えてやつてもよか・・・」

「やかましいったい！！、お前はだいたいなんか！！？なんしにっいてきようとか、こら！！もうおわつとっちゃろうが！！ぶつぶつゆうとらんとさっさ帰らんかあ！！」

ユウサクは・・・とうとう切れてしまった。自分の彼女が侮辱された事にはもちろん腹がたつたが・・・あのかっこいい演奏が出来る目の前の男が、くだらない事をいつまでも言い続ける事がなおさら頭にきた。

そして我に帰って・・・ぞっとした。目の前の男はなにやらポケットを探り、ニヤニヤしながら原ちやりを倒してゆっくり歩いてくる。

（あらー・・・ナイフかなんかだすとかいな？・・・死んだかな俺？）

などとぼんやりと考えていたユウサクだったが、とりあえず、数少ない喧嘩経験から考えて・・・先手必勝！！と慌てて気持ちを切り替えて、猛然とヤマグチに突っ込んでいった。

「やめて!-!」

ユウコに覆いかぶさられて突進がストップする・・・

「止めでいいけん・・・どいて!」

そういつてユウサクは力を込めようとしたが・・・

『やめとき・・・多分ラリッとうけん・・・怪我するよ』

そう耳元で囁かれた。

・・・やっぱり。

ヤマグチはヤマグチで、ユウコが被さっているので何もできないらしく立ち往生している。

ユウサクは「ビビってる」と思われるのが癪にさわったのでもう一度力を入れて、ユウコをどかして・・・

「なんやあ！もうこんとか？！おおっくら！！」

ともう一度挑発して見せたが・・・ユウコがまたしがみついてきて

『ホントに止めて！危ないっちゃん・・・この人！』

とまたもや囁く。さすがに怖くなったが、男としてこのままでは終われない！相変わらずヘラヘラしているヤマグチににらみをくれてやるが、

・・・・・・・・・・・・・・・・

ヤマグチは両手をあげた。

「わかった・・・もう帰る。・・・お前結構男らしいなあ・・・」

といい、ユウサクの肩を（ポンポン）と叩いてから原チャを起こして跨った。

「ユウコ・・・後悔すんなよ！」

「する訳なかるうもん！！もう顔見せんで！！」

ユウコに救われたユウサクだったが……

身体が芯から熱くなり、せっかく家の近くまで送ったのに、結局家に戻らずまた電車にのって、ホテルに泊まり、激しく愛し合う二人だった。

つづく

絶体絶命（後書き）

とりあえず・・・なんとかなりました。怪我せずに。

区切り（前書き）

障害がなくなりラブラブな毎日かと思いきや・・・

区切り

なんの気兼ねもなくユウコと付き合いだしたユウサクだったが・・・

2人の間が冷めるのは以外と早かった。

ユウコはよく嘘をついた。

「あたし妊娠したみたい・・・どうしたらいい？」

「はつきりしてくれんけんもう始末した。」

「他の男が家まできてしつこくするっちゃん・・・怖い」

「病気で入院する。検査せなわからんけど多分ガンみたい。」

などと・・・とにかくユウサクを心配させる様な嘘を日常的についた。

最初はかなり驚き、心配してつきつきりになったりしていたユウサクもだんだんとユウコの嘘になれてしまい動じなくなる。するともっと大きな嘘をつく。この繰り返しだった。

かといって、若いユウサクはセックスの相性のいい彼女と別れてしまっただけ、聞きわけのいい「性欲」は持ち合わせていなかった。したがって愛情はどんどん薄れていき、身体に対する執着だけが大きくなり、それが焼餅（嫉妬）を生み、ユウコを満足させて、二人は

続いていた。

ある日の事、キクから「話がある」と呼びだされた。

「なんね？・・・俺だけと話がしたいって？」

「・・・お前さあ・・・プロになりたいって思っとう？」

「・・・なんやそれ？・・・まあなれたらいいなあっては思っとうよ。」

「じゃあ、なんでこの前の話反対した？」

その一週間前に、プロのスカウトに声をかけられて話をした。

『一回東京に出てきなよ！ライブの手配ぐらいはできるし、向こうでやらなきゃ、こっちにいてもしかたないだろ？』・・・と。

スカウト・・・と言う程のものではなく、他にも似たような事を言われたバンドはいた。いうなれば【つばをつけた】程度の話だった。

キクはすぐに東京行きを提案したが、残りの2人、特にユウサクは反対した。

保障はなにもない。仕事も住むところも。どう活動するかも考えて

立ち回らないと・・・まだ早い！などと、理由を上げていった。

キクはしばらく粘っていたが、ユウサクの意志が固い事を受け、その場は引き下がった。

「ああいうチャンスを、屁理屈で逃したくないったい！」

「じゃあ、どうするとや？」

「それはお前次第やないか！お前が気持ちば入れ替えるっていうなら、次に掛けるけど、気持ちが変わらんなら・・・辞めてくれ！」

「・・・・・・・・・・おお・・・判った。」

あまりに急な退団勧告だったが、ユウサクからすれば『もう、ついていけん』という気持ちだったしキクからすれば『あしでまとい』であつたろう。お互いを判り合っているからこそ、話は20分と掛からなかった。

コウシロウは、キクから聞かれて、考えを変えたらしい。

結局、ユウサクだけが抜けて「グラナダ」はメンバー加入してやり直す事になった。一度は計画されたユウサクの退団ライブだったが、日に日に落ちていくモチベーションは・・・そのライブすら辞退する結果になる。まさに「嵐」のような一年間だった。

考えてみるとユウサクは学生だった。とりあえず来年度に学校に生き直す為にバイトを始める事になった。

近所にあるファミレスに面接に向うも・・・髪の毛をどうにかしろ！と叱られて、床屋に一年以上ぶりに向う。レストランに努められるぐらいに切りそろえられた髪型でもう一度面接に行き合格。

しかし採用されてから初出勤まで2週間かった。

いきなり長い髪を切ったために【ひどい風邪】をこじらせてしまったのだ。

つづく

区切り（後書き）

風邪・・・酷かったです。この時は久し振りに39 とか出ましたから・・・不摂生がたたったんでしょうか？

フクちゃん（前書き）

俗にいうところの

フリーターになったユウサク・・・バイト先の出会いからまたもや
ごそごそ動き出します。

フクちゃん

かなりひどい風邪をこじらせた後、やっとバイト生活が始まる。

朝10～16時の六時間勤務の約束だった……が。

毎日欠員が発生して残業になる。

「ごめん……ユウサク！22：00まで残って!!」

「別にいいですけど……」

こんな感じで、気がつけば40日も連勤させられていた。

休みの朝、久しぶりに出かける用意をしていたら電話が鳴る。
店長からである。

「ごめん、昼過ぎまででいいから手伝って!!」

「いやあ、買い物に行くところなんですけど……」

「昼過ぎになったらいいから!お願い!!」

「はあ……」

しかし、昼過ぎになると店長はこつこつ。

「もう少しだけいい?」

拳句の果てに、夕方、店長と交代で来た主任は・・・

「休憩行つて来て！」

「ええっ?? 休憩つて何時まで働かせるつもりですか?!」

「あれっ? 店長は『ユウサクは暇だから』っていったよ?」

いつもこんな感じでこき使われた。

（懸命な読者のみなさんは、もうお気づきかとおもいますが・・・）

ユウサクは店に毎日来たい理由があつた。

朝から働いているバイトスタッフで【フクちゃん】と呼ばれる女性
がいた。

（なんか・・・大人の女って感じやねえ）

ユウサクからみて3つ年上の女性で、地味ながら色気が湧きだすような女性だった。その人は日曜に定休だったので、平日は毎日出勤していた。

ユウサクの休みは平日だったので、休みの日に呼ばれると『フクちゃんに逢える』ので、出勤していたようなものだった。

ここで問題が発生する。

そう、ユウコである。40日も休んでないユウサクなので、当然デートもできず・・・毎日のように電話で不満を言われる。しかし、実際バイトなので適当に返事をするばかり・・・

そんなこんなで45日目にして3連休になった。

ユウコと久し振りの逢瀬も、気持ちが入らず・・・

「浮気しとつちやなかるうね?!」

「そんな暇あるわけないやん、バイトばかりって・・・」

「バイト先で女つくつとつちやないと?」

ヒステリックに騒ぎたてられ、もともと薄れていた愛情が輪を掛けて目減りしていく・・・（精神的には立派に浮気なのだが・・・）

結局、三連休になったことをユウコに言わず、一日しか逢わないユウサクだった。

フクちゃんは大人だった、話しかけてもなかなか隙を作ってもらえず・・・何とか食事や映画に誘うのだが・・・即答で断られる。

「ええ？・・・嫌！」「いく理由がない。」「なんで？もつと若い子誘いなさい！」「車もないくせに・・・車買ったらさそつて。」

ことごとく玉砕である。

少しばかり【もてる】と思っていたユウサクは、バンドがなければ自分にはなんの魅力もないのかと、若干自信喪失しかけていた。

そんなある日、珍しい事に『フクちゃん』のほうから話しかけてきた。

「ねえ・・・あたしと遊びにいきたいっていったよね！？まだその気ある？・・・ていつてもご飯ぐらいだけど、いく？」

どうした風の吹き回しか、ユウサクはすぐにOKした。

u
u
<u

フクちゃん（後書き）

いままで断ってきたのに・・・なぜ？

次話にて詳しくお話しできると思います。

大人の魅力（前書き）

棚ぼた気味にデートの約束をとりつけたユウサク・・・

ただでかえすつもりは毛頭ない！！さあどこころぶのか？

大人の魅力

「どこ行く？」

「なんが食べたいと？」

「別になんでもいいけど・・・」

「じゃあ・・・天神にでらん？」

「えー・・・わざわざ？・・・まあいいや。いこうか・・・」

急に実現したフクちゃんとの食事。ユウサクは気合を入れて街中のイタリアンにエスコートした。以前から女性受けのよい店に自信満々で。

ところが・・・

「どうやった？美味しかったろ？」

「うーん・・・なんか食べた気せんね。あわんみたい。あたしは居酒屋のほうが好きかなあ・・・」

反応は思わしくなかった。

それからバーに行き、酒を飲み話をした。今彼氏はいるのかどうか？

肝心の質問はすべてはぐらかすフクちゃんだったが、ユウサクの事は悪くは思っていないようだ。

（今日しかチャンスはないかもしれん・・・絶対落とす。）

何とかホテル街に連れていこうと、酒を飲ませ続けるが・・・あつという間にユウサクが先につぶれてしまい・・・気がつけば帰りのタクシーだった。

「家どこなん？とりあえずあたしの家に向かいようけど・・・起きんけん困ったとよ。」

「・・・ごめん・・・じゃあ、一緒におりる。」

「・・・うん。じゃあちよつと話す？・・・運転手さん、ここで降りまーす。」

フクちゃんの自宅は海沿いの公園の中にあつた。防波堤に腰かけて海をみながら、いろんな話を話した。

「あたしさあ・・・彼氏おるっちゃん。でもその人もうすぐ東京にいくと。なんも言わんけど別れたがつとうみたいやんね・・・」

「誰？・・・俺のしつとう人？」

「誰でもいいやん！！、真面目に落ち込んどつとよ！慰めるとか！励ますとかないと？」

「・・・励ます？？なんで？俺としては・・・別れてもらった方が都合いいし。別れたらいいやん！！

「えらい簡単にいつてくれるやん！責任とってもらつよ！」

（これってもしかして脈あり？？）

「・・・いいよ！責任とるよ！」

「本当？・・・信じるよ！！？」

フクちゃんが上目使いに寄り添ってくる。

月明かりしかないので自分が真赤になっている事を悟れないのがありがたかった。

「ほんと！絶対！嘘なんか・・・」

途中でフクちゃんに唇をふさがれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・？
！

とびつきり『大人の味』がするキスだった。

ただのキス・・・なのにユウサクは下腹部に熱いものがこみ上げ、本能のままにフクちゃんを抱き締め、押し倒そうとした。

「・・・まって、ちょっとまって、外は嫌よ！」

それからユウサクの物欲しそうな顔を見て、

「・・・もう。」

下腹部にそつと触れて

「まだ若いもんね・・・このまま帰っていても困るか・・・」

そついいながら固くなったユウサク自身の部分をさすりながらまたキスをする。

「・・・ちょ、ちょっと・・・」

「いいからいいから・・・まかせて！ふふふ」

そついつてフクちゃんはユウサクのズボンのファスナーを下ろし、

ゆっくりとユウサク自身を導きだした。

大人のキスをされながら、やさしい手つきで一番敏感な部分をさすられて、ユウサクはどうする事も出来ず・・・ただ喘ぐ事しかできない。

初めてのセックスの時に一晩かったユウサク少年は、大人の女性、フクちゃんのキスと右手によって、わずか10分で上り詰めた。

海に向って射精したユウサク自身と、自らの右手についてしまったものを、ユウサクをみながら丹念に口できれいにしていくフクちゃん。

不覚にも、綺麗にされている最中にまた固さを取り戻してしまうユウサクだった。

「えゝ？・・・なんね、今出したばかりなのに・・・もう！」

そういつて身体の向きを変えて、もう一度口で奉仕を始めるフクちゃん・・・またしてもユウサクは喘ぐばかりで抵抗も出来ない。

今度は、何とかフクちゃんの豊かな胸だけはじかに触る事が出来たが、他にはなにも出来ずにまた10分程でフクちゃんの口の中に熱を吐きだした。

「濃いい・・・ちょっとむせた。」

しばらく2人で余韻にひたり抱き合ったりキスしたりを繰り返し、フクちゃんは、いきなり核心をついてきた。

「まあ・・・まだ急がんでもいいけど、ちゃんとしてね!」

「ちゃんと?・・・なにを?」

「とぼけると?!彼女おるやろう!?!あたしと付き合っならちゃんと別れてきてね!!あたしもけじめつけるけん!わかった?」

「・・・ああ・・・判ってる。ちゃんとする。」

少し憂鬱な気分になるユウサクだった。(そういえば、今日電話してない・・・怒っとうやろっね。)

現金なもので、肉体的にすっきりしてしまうと、それ以上身体を求めずともよくなってしまふ。

それからフクちゃんを家まで送り届けて、星をみながら家路につくユウサクだった。

(明日はユウコに連絡せないかん・・・)

う
う
く

大人の魅力（後書き）

終わってしまえば、大人の女性にはまったく歯がたたなかった。この後、ユウコとどう決着をつけるのか？

初めて（前書き）

フクちゃんとの関係はすすみながらユウコの事がきにかかるユウサ
ク・・・だが進む道は一つしかない。

初めて

これまでの経験で、『二股』はなかった。

いつも付き合っている相手に一生懸命だった。だから他に目がいく事がなかったからだ・・・今回、ユウコという彼女がいるにも関わらず、フクちゃんと関係を持つ（といっても一方的に弄ばれただけにすぎないが・・・ユウサクとしては『肉体関係』とカウントしていた。）事にあまり抵抗はなく、それどころか望んでそうだったのは、やはりすでにユウコに対して『愛情』が存在せず、『身体への執着』だけで情性の付き合いを続けていたからに他ならない。

しかし、そんな自分自身の気持ちを読み切れず、ユウコになんと言っていないかわからないユウサクはそれから3日間、自分からはおろか、電話があっても『留守』を使い話をしなかった。

フクちゃんとは毎晩のように海辺で逢って、話をしてキスをして・

・
行き場のない欲情にかられては『手』や『口』で鎮めてもらう繰り返しだった。ユウサクからは何もさせて貰えず（服の中に手を入れて胸を触らせてくれるだけ）関係を結ぶのはユウサクが彼女と別れてから！

そう決めているようだった。フクちゃん自体も（早く抱かれない）と思っているのは間違いなかった。なぜなら一度だけユウサクがフ

クちゃんのスカートのなかに手をいれて、半ば強引に大事な部分に触れた時、

下着の上からでもわかってしまう程潤っていたからだ。

激しく抵抗してフクちゃんはこう言った。

「今度勝手に触ろうとしたら、キスも【あれ】も二度としてやらんけんね！！判った！！؟؟」

その時、自らも欲情している事がばれた事で、フクちゃんは少しだけ余裕を無くしてユウサクに激しく怒り、まくしたてた。

ユウサクはフクちゃんも興奮している事が判っただけで満足したし、大事な部分に触れた手を洗ったりせず、家に帰ってからその手の匂いだけで・・・もう一度自身を慰めて眠った。

ユウコと連絡を絶って4日目・・・

「ユウサク！！ユウサク！！何回もユウコちゃんから電話かかってんで！！いい加減起きてでなさい！！」

母ヨシコにたたき起こされ、しぶしぶ電話にでると、こちらも怒鳴り声。

「なん考えとうと！！！？？なんで連絡せんやったん？物凄いい心配したとよ？ねえ！！なんか言つてよ。！！」

「・・・ああ・・・ごめん。忙しかった。」

「電話くらいできろっもん!!??なんしよったと?」

「色々・・・」

「なん??なんそれ??ちゃんと説明してよ!!」

「・・・また今度でいい?」

「今度つていつ?いつ逢えると?」

話す事すら億劫に感じた。

しかし、ユウコとけじめをつけないければフクちゃんを抱けない。

ジレンマの末、ユウサクは答えを出す。

「俺もさあ・・・まだ遊びたいっちゃんね!」

「なんそれ?あたしの事馬鹿にしとぅと?」

「馬鹿にとかしてない。」

「しとうやん!!そんないい加減な事いつてから!いままでどこでなんしよったか教えてっていいよとよ!!?答えになってないやん?」

「やけん色々たい!!遊びよったっていいようやん!」

「色々つてなに?!嘘ばかりついてから!!女やろ!女ができたっちゃん!!判るとよ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・嘘?・・・・・・・・嘘ばかり付きようとはお前やろうもん!!!毎回毎回・・・・・・・・何回俺に嘘ついたか数えてみる!!!自分の事棚にあげて、ぎゃーぎゃーと。女が出来たっていうたらどうするとか?言ってみる!!」

ここで幾分冷静になっ たらしいユウコは肝心な事を突っ込んだ。

「白状したね・・・女が出来たと?」

「まだ出来てない・・・けど今気になる人はおる。」

「判った。別れたいっちゃん?どうなん?それともその女の事忘れてきちんとあたしの事愛してくれる?」

「もう・・・・・・・・・・・・・・・・愛してない。・・・ごめん」

「ごめんって・・・何?じゃあなんで今まで付き合いよったと?セックス出来るけん?」

「それもある。けど愛してないっておもったのは今。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんか、ちゃんと言い合いしたら気づいてしまった。」

「・・・・・・・・・・もういい・・・」

「え？」

「もういいっていいよったい！このへたくそ！！」

「・・・・・・・・・・へたくそってなにが？・・・」

「セックスに決まっとうもん！！ただ時間ばかりかかってから、いつまでたつても上手にならんし・・・もういらん！！あんたなんかいらんけん！！その、気になる人どこにいけば？」

「わかったそうする。・・・へたで悪かった。」

「・・・・・・・・・・」

ユウコは泣いているようだった。

だがとてもやさしく出来る気分ではないユウサクはしばらくユウコの鳴咽を聞いた後、受話器をゆっくり置いた。

落ち込んでいた。

呆れた事にユウコを泣かせた事ではなく『セックス下手』と言われた事に対して、面白いまでに落ち込んだ。これまで客観的に自分の性行為を見つめた事など無論なく・・・はつきり言われた事で壊滅的にセックスに対する『自信』が崩れ去った。

（ユウコと別れたらすぐにでもフクちゃんを抱きたい。）

そう思っていたのに、その日はフクちゃんとのデートを断り、家にもって落ち込むユウサクだった。

短気だが気持ちの切り替えは早いユウサクである。

次の日になると、キチンと別れた事の素晴らしさに気づき、急いでフクちゃんとのデートの約束をすると、わくわくしながら仕事が終わるのを待った。

フクちゃんとの【初めて】はユウサクの部屋になった。
あまり甘い記憶ではないので繊細は省きたいと思う。

「ダメだし」の連続だったからだ。

キスの仕方しかり、服の脱がせ方しかり、大事な部分に対する指使い、舌使いしかり、拳句の果てには

「腰の使い方が下手・・・今までなん習ってきたと？」

途中で何度も萎えた・・・が、その度にフクちゃんは甘い言葉とキス、そしてやさしくユウサクに触れるだけで、まるで魔法のように元通りの固さにもどしてしまう。実際に繋がってから色々注文を繰り返され、何とか二度目に合格を貰い、無事にフクちゃんを満足させる事ができた。

これからこのフクちゃんとは長い長い年月を共有する事になる。

う
う
う
う

初めて（後書き）

無事、新しい彼女が出来たユウサク。これでロックの世界との関係もなくなったのだが・・・次回新たな展開が・・・

これも青春の二ページ（前書き）

少し遡つての話です。まだグラナダにいた時の、ちょっとしたエピソード……

これも青春の二ページ

番外編・・・・・・・・・・（これも青春編）

一番むちやをしていた19〜20才の頃

グナダでのライブ活動も週一は必ずあり、その間にアルバイトをして金を稼ぐ・・・

そんな生活をだらだらと送っていた頃の話。

一時はあまりに忙しく、ボウヤ（当時、バンドのファンの若い子たちは進んで、ライブの手伝いや、機材運びなどをボランティアでやってくれた。その子達を称してこうよんでいた）の中から、女の子をひとり選んで（マネージャー）をやってもらっていた。

《この女の子は本章にてすでに登場しているヤエコである。》

グナダのバンド構成は3ピース。ボーカルギターとベースボーカル（ユウサク）ドラム。ジャンルはボーカルが「ヘビメタ」自分が「ビートルック」ドラムは「何でも」出身だったので、とりあえず思いついたままに曲を作りなんでもやった。基本はポップとロックである。見た目は髪の毛が金髪と真赤と普通に黒髪で、ファッションもまちまち、衣装はサイケデリックな雰囲気になっていたが・・・

当時、金髪や赤毛なんて「パンクロッカー」しかしていなかった。しかもボーカルのキクとユウサクはロン毛・・・

・
そうソロライブ以外は「タイバン」を組まれるのが普通なのだが・

グラナダの音楽性をキチンと理解していないライブハウスは知名度だけで呼んでおいて・・・タイバンが「パンク」というのがよくあった。

当時のパンクはとっても恐ろしかった・・・

ある日のライブ、恐れていた事が現実になる。

当時、「博多のハードコアパンクのドン」と呼ばれていた人達とタイバンになったのです。そりやもう凄い「武勇伝」がいろいろとあるバンドで、とりあえず挨拶に、「こんにちは！」と明るく若手らしく・・・

ドラムが留守でボーカルがいた・・・

で、しばらく話していると何と同じ年！しかもユウサク達とは全然違う某進学校出身、共通の知人もたくさんいるではないか！？

（なかよくなれそうだ！）とユウサクは内心ほっとしていた。

するともうすぐリハーサル・・・というところへ

見るからに「ごつい」「こわい」「やばい」「切れてる」「狂って

る？」的なでつかいパンクロッカーの方がどすどすと入って来た。みると手と言わず拳といわず、ダラダラと血が！！！（怖い！！）

ボーカルがその得体のしれない男に話しかける。

「どうしたあ??」

「あ? ああ、こないだの人質クンがたった3にんで仕返ししにきたから帰りうちにしてやった。・・・つぶぶ」

と、なにやら怖い会話が聞こえてきた。どうやらこの男がリーダーでドラムの「武勇伝」の主役らしい・・・（やっぱあまり仲良くなるのは辞めておこう!）と思い演奏の準備にかかったが、キクはなぜか気にいられた様子で、よくしゃべっていた。

ライブが終わり、打ち上げに誘われたが（運良く）予定が入り、丁重にお断りして（しかもユウサクだけ）帰ることに、コウシロウも帰りたがっていたが、早い者勝ちと、ユウサクはさっさと引き揚げた。

《無理やり、何人もの友達に電話をかけて作った予定なのだが・・・》

次の日、ユウサクは気になっていたことを打ち上げに参加していた他の2人に聞いた。

「あの、人質クンってなに?」・・・と

キクは『ああ、あれ・・・』と語り出した。

なんでも、彼らが飲んでいる時にヤンキーに喧嘩を売られ、外に出ていたら総勢20数名もの暴走族が！囲まれてその場はボコボコにやられたらしいが・・・ここからが武勇伝。後で調べてその暴走族が集まる店に狙いをつけて、小人数の時を狙いタコ殴り。その中から前回の喧嘩の元になった人間を連れて帰り「人質」に！

それから2、3日ではほぼ全員に報復をして、おまけに身代金までとって人質を解放した。・・・と

その後にあのライブがあったという話。

まあ、キクが気に入られてそれから、しょっちゅう飲みに誘われていたのはいうまでもないが・・・

グラナダの音楽性を理解されてからは、こんな無茶なタイバンは組まれなかったが・・・

これもまた、青春のページ。

これも青春の二ページ（後書き）

次号は本章に戻り更新していききたいと思います。

あせり・・・（前書き）

お色気からはなれますが・・・（ちょっと）
バンドとの関係を見直すようになったユウサクがここにいます。

あせり・・・

毎日平平凡凡と暮らしていた。

もとよりアルバイトの目的は復学の為である。

その為だったはずが・・・いつのまにかアルバイトする事が目的になり、給料を貰っては服を買い、食事に出かけ遊んで使ってしまうていた。ガリガリに痩せてしまっていた身体も3食決まった時間に食べる事により標準的になり、髪の毛はどんどん短くしていった。

もう誰もユウサクがインディーズバンドでアングラな世界を徘徊していたとは思わない（つまるところ普通の青年になっていた。）

当時の時給は450～500円程が相場であった為、毎月13～17万稼いでいたユウサクは、（今の世の中では考えられない事だが）300時間を軽く超える労働時間だったと計算できる。休みも必要のある時だけ希望してもらっていた為に、月に1～2回しか休まない事も珍しくはなかった。

ある日、新人の教育担当を仰せつかり、さっそく面談、導入教育をしていたのだが、その女の子（高校生）にはなにか違和感がある。

その理由はすぐに判った。髪の毛が赤いのだ！飲食業でバイトを希望する癖になんだこの色？ユウサクはそう思いその子に尋ねてみる。

「あのさあ・・・髪の色、なんも言われんかった?」

「・・・ああ、これですか?さっき黒染めしてこいって言われました。うるさいですよ!学校じゃあるまいし・・・」

「いや、学校じゃないけん言われるっちゃないと?てか、この仕事するのにその色できたらダメやろ!」

「ええ?・・・まあ・・・今日かえったら染めますけど。ユウサクさんて社員なんですか?・・・うるさい」

「うるさいって?、まあいいや、なんでそんな赤なん?他の子はそんな色じゃなくてもつとなんちゅうか栗色みたいにするっちゃないと?」

「ふふ・・・あたし『ヤンキー』じゃないですよ!ロックが好きなんです。とくにアマチュアで好きなバンドがいて、ライブの時にみんなこんな色にしてるんです。」

「へー・・・バンド好きなん?俺アマチュアやったら知り合い多いよ!どのバンドのファン?」

「えっ詳しいんですか?あたし、『グラナダ』っていうバンドのファンなんです。知りあいいますか?キクさんというボーカルがめっちゃかつこいいんです!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

絶句した。まさかグラナダのファンがこんなところでバイトしているなんて・・・（というか元メンバーがバイトしているのだが）

ユウサクは迷った挙句、とぼける事にした。まさか元ベ이스トの自分がこんなところでバイトして、口やかましく常識を話しているのが恥ずかしかったのである。しかもフリーターなのに・・・

「いやー・・・あそこは仲いい奴は・・・おらんかなあ」

「なーんだ・・・がっかり。」

「ごめんごめん・・・じゃあトレーニングはじめようか！」

その日から、ユウサクは部屋でぼろっと過ごす時間が増えた。調べてみると、グラナダはメンバーチェンジを経てますます精力的に活動していた。あの ロッキンバレンタインにも出演を果たしていた。

コウシロウやキクと、個人的に電話で話す事はあるが、バンドの話は一切していない、ユウサクが辞めてもうすぐ一年がたつ。

思い立ってインディーズバンドの専門誌を買い読みあさる。確かにグラナダは博多での存在感を増していた。なにか目標もなく毎日ダラダラ過ごす自分が腹立たしく感じ、言いようのないジレンマに陥った。

そんな時はいつもフクちゃんを家に呼び、いつものように最初は甘え、愛してもらい、途中から交代してユウサクが攻め、激しく突き立てて果てる。そんなパターンができていた。

フクちゃんは付き合い始めこそ、ユウサクに厳しく注文をつけ、自分が優位にたつようにしていたが、3つも年下のユウサクが可愛くなってしまったようで・・・最近ではなんでもユウサクの要求通りにして尽くしてくれていた。それをいい事にユウサクはすっかり甘えてしまっていた。

いつも疲れ果てたユウサクを寝かしつけ、そおと家に帰るフクちゃんだった。

そんなある日、久し振りにコウシロウから連絡があった。

「今週末さあライブするっちゃけど・・・見にこん？」

「・・・ああ、いいよ。」

「まじで？来る？来るならチケットとつとくよ！」

「うん、じゃあ頼む。」

辞めてから一度も演奏を聞いていなかった。
誘われても行く気持ちになれなかったのだ。返事をした後で自分自身が驚いた程だった。

つづく

ロッキンバレンタイン・・・当時有名なアマチュアを集めて行っていたイベントです。ネームバリューが一気に跳ね上がる事で狙っているバンドは多かったと記憶しています。

あせり・・・（後書き）

さあ・・・ライブを見てどう感じたか？

ユウサクのやりたい事はいつたいなんなのか？

迷走（前書き）

ライブにきたはいいものの・・・

驚きの事実を告げられて・・・

迷走

「久し振り！！」

「おお！ユウサク！！元気やった？」

ユウサクはグラナダのライブに来ていた。リハを見学してそのまま懐かしい面々と話し込んだ。

グラナダはユウサクが脱退したのを機にギタリストの『エビス』を入れ、代わりのベーシスト『バン』とキク、コウシロウの4ピースバンドになっていた。それぞれ面識はあり、特にバンに関しては、ユウサクが弾いていたベースがあまりに独学すぎてコピーできず、しばらくユウサクの家に習いに来ていた程なので仲はよい。

音に厚みが出た分、3ピースの頃の弾けるようなリズムの躍動感はなかったが、【グラナダ】という一つのジャンルができ上がりつつあった。

少し音に対しての質問や、アッパーなナンバーの迫力不足など苦言を呈したのは、自分達のやるべき事をしっかりとやってきたキクやコウシロウに対しての『やっかみ』があったのかも知れない……

始まってしまえば、昔と変わらず、ファンの子たちが前列を陣取り

奇妙な動きで曲に併せて踊っている光景が見える。

（変わらんねえ・・・）

・・・と、なんと最前列にあのバイトの女の子がいる！確かに熱狂的なファンようだ。ユウサクに気がつかなかったという事は今のメンバーになってからのファンだと思うのだが・・・

ライブが終了してメンバーが控え室に戻ってくる。

「どうやった？！俺なりにユウサクの音は崩さんように弾きよっちゃけど・・・」

バンが気にして聞いてくるが、ユウサクは上達ぶりに脱帽で

「いやー・・・上手くなったね！！もうバンのリズムになっとっちゃん、俺がどうか気にせんでいいっちゃないと？」

「そげん言ってもらえたら嬉しいけど・・・」

「ユウサク！！ちょっとよか？」

ギターのエビスが手招きしている。

「なん？」

「じつはさ、俺・・・今日でグレナダやめるったいね！」

「ええっ・・・みんな知っとうと？」

「うん、結婚する事にしたい！」

「そうなんや！！エビスって俺の2こ上やったろ？早かねえ」

「うん・・・で、変わりのギタリストがいるけん、いろんな奴とセッションしてみるっちゃけど、なかなかキクとあわんちゃんね・・・で！俺から頼みなんやけど・・・」

「・・・なんね、俺ギタリストの紹介やしきらんばい！」

「いーや出来る！」

「そりゃあ、何人かはおるけど・・・みんなバンドもっとうもん！」

「・・・相変わらずやね、お前がはいりゃあよかろうもん
！」

・・・

・・・

・・・

「俺??!!おれベーシストやん！」

「お前、バンのベースどう思う？」

「うん！上手くなったねえ・・・」

「もうグラナダにはバンのベースがいいと思うったいね！」

「・・・それと、俺がギターっちゅう話のどこが繋がると？」

「キクはお前が辞めると思わんかったみたいやんね」

「そげな事ないやろ！15分かそこらで決まった話やんか！！」

「いや、お前は判つとらん。あいつは今でもお前とやりたい筈！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「急に言われてもねえ・・・」

もうステージ前からアンコールの声が5分以上聞こえてきている。

そこでエビスは予備のギターケースをユウサクに渡す。

・・・・・・・・・・・・・・・・？

「キクにはおれが言うとかけん、アンコールはラブチャーナイトにすること、コウシロウにもバンにも伝えてある。お前もあれならキ―で併せてリードも弾ける？アンプもマイクも用意しとっけん。出てくるか出てこんかはお前に任せる。・・・よかね？」

エビスは一方的にしかも用意周到に準備していた事まで告げてアンコールに出ていった。

演奏が始まるまで、MCも入れて1分もない・・・

（まあ後の事は後で決めたらいいか！）

覚悟を決めてユウサクはステージに上がった。

エビス、バン、コウシロウはこっちをみて微笑んでいる。

・・・・・・が、キクは気づいてないのか？こっちを見もしない。

（愛想のなかねえ・・・手ぐらいあげりゃあよかろうもん。）

お客さんの反応はまちまちだった。
知らない男が乱入しているのだからざわめきがあって当然なのだが、中には古いファンもいるらしく、

「あれって・・・ユウサクくんやない?!」

「違うやろ!もつとやせとつたる?」

などと色々いわれて若干恥ずかしく思いながらも、ユウサクは、自分の存在が忘れられていなかった事に安堵するのだった。

いきなりカウントがはじまり、曲がはじまる。

ギターの練習を毎日やっていた訳ではないが、好きなところで好きに弾くだけなので緊張もなく、段々気持ちよくなってきた。

リードの手前でキクが近づいてきた。

『弾いてみる』

あごでそう言った。

ユウサクはうなづいてキクの前に出ていきリードを弾く。

昔キクが好んで弾いていたフレーズをアレンジして……

「お前、どうする?帰ってきたいとや?」

みんなに引つ張られて無理やり参加させられた打ち上げでキクはいきなり聞いてきた。

・・・・・・・・・・

「お前はどんな？帰ってきてほしいとや？」

ユウサクとしては、辞めた経緯から頭を下げて戻るつもりはなかった。

「お前らくさ・・・・・・・・素直になれって！」

エビスが横からちゃちゃを入れる。そして

「あとは頼んだじえ！ユウサク」

そういつて全員にビールをついでまわり・・・

「俺の引退と、ユウサクの復帰を祝って・・・・・・・・かんぱーい！！」

「ちょ、ちょっと待ってよ・・・・・・・・まだなんの心の準備も・・・・」

ある程度盛りあがった頃にファンの子たちが合流してくる。

「ユウサク・・・・・・・・さん？」

・・・・・・・・そうあのバイトの女の子が来ていた。

(やっぱり・・・嘘ついとったけんね)

「ああ!!お疲れ!」

「お疲れって・・・グラナダに知り合いはいないんじゃないかなかったですっけ?」

「ごめんごめん・・・まさか元メンバーですっていえんでから・・・つい知らんっていつてしまったんちゃん。」

「すごいじゃないですか!元メンバーって。今日参加してたけど・・・また戻るんですか?」

「そうそう、俺の代わりにギターでね!」

エビスがさらつとぶちまける。

「えゝ・・・す・・・ごーい!!あたし毎回来てますからね、がんばってくださいね!」

「う・・・うん。がんばる」

こうして勢いと流れでバンド復帰を決めてしまったユウサクだった。

つづく

迷走（後書き）

勢いで決めた事というのは・・・必ずほころびや破たんが生じます。
こんどのこれはどうなるのか？

マツチン（前書き）

ギタリストとしてバンドに戻ったユウサク・・・
しかし、ギターが得意という程ではない、そんなユウサクが思いついた上達の方法とは？

マツチン

バイト先にも、彼女にも何も相談しないままバンド復帰を決めてしまった。

どちらもありいい返事はもらえなかった。

まずバイト先だが、ライブの関係上、日曜はほとんど休まなくてはならなくなる、そして練習後、遅くなる日は自宅に帰れず次の日の朝一出勤が出来なくなる為にかなり変則的なシフトを組んでもらう必要があった……

そして彼女のフクちゃんだが、もともとバンドマンであるユウサクに興味があった訳ではなく、3つ年上の彼女からすれば、就職してキチンとしてほしい気持ちはあっても、今更社会人と逆行する状態になるのは歓迎できる事ではなかった。

「なんで？……なんで今からバンド？したいと言った事ないやん。」

「ごめん……やり残した事があつたって気づいたけん。」

「なに？『やり残した事』って？」

「前の時にはチャンスがあっても活かしきれんやつたっちゃん……やけん今度は、もしプロへの道が見えたら、がむしゃらにやってみ

「たいっと思つと。」

「ふーん……。まあ、あたしは構わんけど、協力はあるまいできんよ」

「うん、わかった。」

いざやってみると・・・バイトとバンドの両立は以外に大変だった。

寝不足は日常茶飯事、完てつもしょっちゅう。それでもユウサクは努力しなければならなかった。

グラナダにギタリストで復歸したからである。

元々ベーシスト、しかも独学である。ギターは遊びでしか弾いた事はなくコードと、簡単なスケールをしているだけ。

ユウサクは中学の同級生である「マツチン」にギターを習いに行く事にした。マツチンは中3からギターを始めてすぐにバンドを結成し、瞬く間に近隣では知らぬ者がない程有名になった『天才ギタリスト』だった。

高校卒業を控えた時期にマッチンと一度だけバンドを組みライブをする機会があつたが………。

すぐすぎて、呆れてものが言えなかつた。

ただ上手いギタリストはいくらでもいる。ユウサクはそれこそいろんなバンドに入っているんなギタリストとセッションしてきたので

かなり目と耳は肥えている自負があつたのだが・・・

（次元が違う・・・）のである。マッチンがギターを弾くと、ギターの笑い声や怒った声、そして泣いている声までもが聞こえる。

（ユウサクは初めて一緒にスタジオに入った時に、感動で涙した）

そんなマッチンに連絡して、

「ギターせないかんちゃけど・・・教わりにいってもいい？」

恐る恐るたずねると

「ああ、今バンドしてないけん夜中ならいいよ。」

あつさり承諾してもらえた。あのうまい人から習えばすぐ上達できるはず！ユウサクはそう信じ、わくわくしながらマッチンの家に向った。

ところが・・・・・・

そのわくわく感は初日、それもものの10分で消えさる。

どの程度弾けるのか見たい、とマッチンは言った。ユウサクはとりあえず自分が弾ける曲を2、3つま弾いたのだが・・・

しばらく黙っていたマッチンはテープをユウサクに渡す。

「これ・は？」

「そのテープの曲を明日までにコピーしてきて。」

「何曲あると？これ」

「さあ？・・・4～5曲やない？」

「うん・・・解った。」

さっそく帰ってテープを聞いてみる・・・絶対一晩では無理だと思う。

それでも出来るところまではやってみたが・・・

次の日にユウサクの状態を知ったマツチンは、顔には出さなかったが、あきらかに落胆した。マツチンは天才ゆえに、みんなも自分のように簡単に出来る！と思っているようで、ユウサクはそれでも食い下がり、マツチンがどうやって曲を覚えるのかを見せてもらったが・・・

まるで参考にならなかった。一回聞いたら、もう弾けてしまうのだ。

（実際にテープを持ち込んで何度か試したが、いつも簡単に弾けてしまっていた。）

一番の違いは『耳』のようだった。ユウサクもそれなりに音楽活動してきた人間なので、聞けば、各パートごとの音がおおよそ理解できる。

しかし、マツチンは各パートのメロディを一回で解読してしまう。恐らくは持つて生まれたものの違いであろうマツチンの『才能』にユウサクは激しく嫉妬した。

そんな事を繰り返し、それでもあきらめずに熱心に指導してくれたマツチンのお陰で、1ヵ月程で何とかユウサクもギタリストらしくなっていた。

最初の頃こそ、なかなかファンにも認められなかったユウサクだったが、負けず嫌いを發揮して、ギタリストとしての作品を次々に生み出す。だんだんギタリストとしての存在感が増えていく中、レコーディングも経験する。

レコードの販売もやっては見たが・・・見事惨敗。ものの見事に売れ残り、メンバーの家には必ずそのレコードがいっぱい残っていた。

グラナダは、それからライブ活動は続けたが、半年後にまたもやチャンスが訪れる。東京進出のチャンスだったが・・・メンバーが二つに割れ、結局ボーカルのキク以外が全員抜ける事態にまで発展した。

コウシロウは学校に戻り、バンは実家の家業にはいり、ユウサクは就職活動を始める。21才になった頃だった。

スケール……ブルース、ペンタトニックなど多数あり。
コードの進行上でこの音の組合せなら何をいれてもはまりますよ！
という音源の組合せ、使うスケールにより曲調ががらつと変わる。

《ちなみに、ユウサクは24才までギタリストとしてバンド活動を
続けるが、最後に止めるきっかけとなったのは、高校の頃のマツチ
ンのテープを聞いた事が原因だった。それなりに4年間努力したユ
ウサクだったし、多少の自信がついた頃だったが、聞いて見て愕然
とする。その頃のマツチンにすら及ばなかった……持って生まれ
た才能の違いを改めて感じ、それから二度と夢は見なかった。》

つづく

マツチン（後書き）

結局、解散に近い形で終わったグラナダ。

これからなにを目標にしていけばいいのか・・・

がんばれユウサク！！

就職そして（前書き）

バンドを辞めたユウサクは就職する事になるが・・・

就職そして

バンドを辞めたユウサクは就職活動に専念するが・・・

ある日店長から「明日、スーツで出勤して！」といわれて、わけが判らないままにスーツ出勤。ピークがおり休憩に入ろうとすると、「一緒に出かけるよ。着替えて！」と店長・・・

車で連れていかれたのはファミレスの九州本部！？もう一人知らない若い男性と同席させられて、何とかマネージャーたらなんとか部長とか言う人達に囲まれている話をして（世間話だったと記憶してます。）食事をごちそうになり帰宅した。（いったいなんだつたんだう・・・）

そんなことも忘れて2ヶ月がすぎた頃、相変わらずどんな仕事をしたらいいか決めかねたままの自分の人生を変える出来事が！

休憩中に事務所に座っているとファックスが流れてきた。ファミレスと言うところは店長以外は半年から一年くらいで移動する。「どれどれ」うちの店はどんな人がくるのかなぁ・・・とみると主任は知っている人だったが、一般職は聞いた事もない名前？他の店はどうだろう・・・見てみると（今はなくなりましたが）博多の筑紫通りの店の一般職に自分と同じなまえの社員が入っていた。（あまり聞く苗字ではないので多少驚きましたが）そのまま休憩が終わり仕事に戻った。

歸りに主任に來週のシフト希望を渡すと

「なんやこれ？」とくしゃつと丸めてくずかごにポイ！

「え、なにするんですか？」と大まじめに聞くと・・・

「聞いてないの？」と言・・・「何を？」

それから店長を交えて説明を受けてびつくり！！

「あ、お前明後日から筑紫通店に移動だから！」

「ええ！？バイトに移動とかあるんすか？」・・・

「採用通知きてない？」「意味判らないんですけど・・・」

「いや、だからこの前本部で面接つけたやん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええっ！！！！！！！！！！」

そう、あの食事は面接だった。その時同席した若い男性が自分のいた店に、そして自分は筑紫通店に2日後移動する事になったのである。（ぜんぜんそれらしい話してないし、入社させてほしいなど

と口にもだしてなかったのですが・・・)

なにやら知らないうちに就職が(一応上場会社)決まってしまった
ユウサク21才だったが・・・

いきなり移動!そして単なるフリーターから正社員・・・

かなり世の中を甘く見ていました。初日に一週間のシフトを見せられて愕然!!休みがない。「しばらく休みないからそのつもりで!」

初めての上司は悪魔の微笑み。(この主任さんはその後の自分に大きく影響をあたえ、現在も会社に残り、九州の幹部社員として貢献されています。)

その店は10:00~2:00の16時間営業でした。

シフトは18~3とか9~18とか12~21とか色々書いているんですが・・・どの日も12~14時は全員出勤(休みの人も)お

昼に集中して集客するのに場所が悪くてスタッフが集まらず・・・社員総出のお昼時が常識だった。

とにかくにも・・・初めての社会人、遅刻はご法度なのだが・・・

今までフリーターとして生活していた自分自身の気が緩むのは2ヶ月ほどたったある日の事であった。前日仕事終わりからたらふくビールを飲み、バイト諸君とさんざん遊び明け方に寮で眠りについた事はおぼえていたが・・・

腹部に痛みがあり、目が覚めるとどうやら蹴られた様子・・・主任が鬼のような顔で立っている。

・・・え！

「時計をみる！」・・・と

時計はもう2時半だった。昼のピークが終了している。

大遅刻！である、この店での遅刻は致命的！激怒され説教されて初めて社会人としての責任の重さを感じたユウサクだった。

それから数ヶ月・・・ひたすらまじめに努めて、やっと「入社研修」の時期になり。子供の頃、神戸から大阪そして福岡に越してきたユウ

サクにとって、県外それも大阪での2週間はとても魅力的だった。

朝から夕方まで研修にどっぷりつき、夜な夜な遊びに繰り出す。いつも同じメンバー。千葉のK君、東京のKY君、大阪地元のW君と福岡のユウサクの4人であった。（不思議とこの4人はいつもいました。）

当時はディスコが健在でしたので、もっぱら食事そしてディスコにいつてナンパ！日によってはお持ち帰りも。（この年定期入社が少なく各自一人部屋だったのです。）当時の北、南をまわり2週間遊び続けた。京都の女の子と知り合い一晩過ごして、真剣に（このまま残ろうか？）などと安直に考えてしまうほど・・・子供なユウサクだった。（笑）

夢のような2週間があつと言う間に過ぎ去り明日帰る！という時に梅田の丸ビルにあるマハラジャに入り楽しく踊っていると・・・「いてー・・・」とKY君の声、見るとさっきからやたらと我がもの顔で場所をとっていた派手な女の子達の中心の女の子とぶつかった様子。「だめでしょ！そんなにばしょとつちゃ！」と女の子のおでこに軽く「こつん」と・・・

ばしーっ！！・・・KY君ものすごいびんたをされている。！！！！

「あんなんであたしの事どついたん！！あたしが誰かしらんのかあ！」・・・と

（おいおい・・・なんかややこしい事になるんじゃない？）と思つたやさき、バシッ・バシッ・と何発もKY君を叩いている。見るに見かねたユウサクたちはあわてて止めに入るも（まきぞえ2発）大変な騒ぎになってきた。音楽もとまりステージが騒然とした頃・・・

新うち登場。誰が呼んできたのか？パンチパーマにストライプのスイツ、中は開襟シャツ白いエナメル。（通常であればマハラジャに入るはずもないみるからに本職の方）何人かの女性に耳打ちされたその男はバーのイスを肩に担ぎあげこちらにまっしぐら！！

「おのれらかあ！！人の女にちょっかい掛けてんのは！！死なん程度に一回殺すぞ！くおらあ！！！」

（ひーっつ・・・お約束！！！）

少し「死ぬ」覚悟を決めそうになっていたところへ店のマネージャ―登場！！なにやらヤ。ザと喋っている。そしてこちらに来て一言。

「うちのスタッフが裏口から誘導しますから、そのままお帰り下さい！あとは何とかします。」

正義感の強いK君と偽善者であるユウサクは、当事者が帰るのはまづかるう？と粘ったが

「お客様にはご迷惑をかけられません。どうぞお引き取りを！」

と結局押し切られ、裏口からすたこら逃げかえった次第です。地下鉄の駅まで（後ろを振り向きながら）4人で走った事は一生わすれられない思いでとなった。

大阪から戻り、業務に明け暮れていると、また移動次は北九州のイ

トウヅ店に勤務が決まった。

ここで地元に残した彼女とはあまり会えなくなり・・・
フクちゃん

ユウサクは悶々とした日々を過ごす、人生を変えてしまうような
出逢いが・・・

アルバイトとの顔合わせが一通り終わったあと、見知らぬ女の子が
出勤してきた。顔は確かに可愛い、しかし何かと生意気な喋り方が
気にいらずユウサクは

『仲良くなれそうにないな・・・』と感じた。

しかし事あるごとにじゃれついてくる『トモコ』にいつの間にか惹
かれていったのである。

就職そして（後書き）

さてさて・・・この女の子とははたしてどんな関係にはってんしていくのか？

しばらくするとまたもや15禁の編があるかもです。

ユウサクお前ってやつは（前書き）

就職した後、色々体験しているユウサクですが・・・

運命の出会いも体験します。

今回は事件性の高い描写の内容です。

ユウサクお前ってやつは

しりあつた当初から、少し生意気な高校生『トモコ』の事が気に入らないユウサクだが、

よく考えると（気になってしょうがなかった）のかもしれない。

北九州市・・・福岡市から約90キロ東北に上った所に位置し、福岡市の150万人に対し100万人と、こちらも九州でたった2つの政令都市である。（福岡の博多に対し北九州市の小倉どちらも区の名前で、北九州市という名前は戸畑市、小倉市、八幡市、若松市が合併する事により生まれた。）

福岡と北九州、車で2時間（高速で1時間）新幹線でひと駅20分の距離である。大きく違うところは以外と知られていないが弁護士の数。

福岡にある弁護士事務所は北九州の10倍以上！逆をいえば北九州には福岡の10分の1以下しか弁護士がいないという事。事件発生率に差がある訳ではなく、もめ事が少なく「やさしい人」ばかりが住んでいるという訳でもない・・・（どちらかと言えば短気な方が多いように見受けれます）

すなわち・・・

弁護士よりてっとり早く、そして合理的、超法規的にトラブルを解決する（その筋の）方が、より地域社会に密接に関係している街といえる。

わかりやすく見解を述べると・・・怖い人が多い・・・と（北九州

の方すみません、データ以外に個人的な見解も含みます。）

そんな小倉北区の至津にある店舗に配属になったユウサクだったが・
・まだ世の中は平成になって1、2年の頃（元年入社なので）いわゆるバブルがはじける寸前であろうか・・景気がよかったのは間違いない。

店は超大型店舗で当時の売上は月商3000万超え、ユウサクがいる時の日商記録は168万だった。（今はすごく忙しいところで3分の1ぐらい？）ウエイティングルームに待ちは入りきれず、レジのドロアーは万札があふれてしまらなくなる（まさにバブル）

ユウサクが一番驚いたのは、スタッフの数、今まで一番多いところで30人位がいいところだった。ところが（入れ替わりも多少いましたが）タイムカードを数えてみると70枚！！（名前を覚え終わったのは1カ月くらいしてからでした。）

そして運命の出会い其の1、店長は30才の若さでエリートコースまっしぐらの兼マネージャー。頭は切れるし、年の割に薄いし、違った意味でもすぐキレルし・・と物凄い人物でした。いまだに尊敬してますし、好きだけれど一緒に店で働くのは勘弁してほしいタイプ。この店長にこき使われ、どやされ、可愛がられた1年であった。

そして、移動して一番最後に名前を覚えた高校3年生の生意気で可憐な少女『トモコ』。これが運命の出会い其の2である。

地元で年上の彼女を残してきたユウサクだったのだが、これから2ヶ月の間にこの少女に翻弄され、やがて惹かれていく。

22才の秋である・・・（20年程前なので多少のずれはご勘弁）

キッチンと付き合う約束もないまま、休みの度に寮まで迎えにこられ、デートに、何度も身体を重ねるうちに「手放したくない」という思いにかられますが・・・地元の彼女になんていったらいいか（振られてばかりで自分から別れを切り出した経験が！）ずるずるしているうちに2ヶ月がたちました。

そんなとき、土曜日の深夜、常連ではありますが、かなり拳動不審で目つきのおかしい30代の男性が2時頃コーヒーを飲みに来店、他には5〜6組いたでしょうか？もう1組新規が来店されたのでお席にご案内をしていると背後から（たったった！）という音が聞こえたので・・・後で聞いたら走りこんできていきなり殴られたようです。（痛）

振り返ったところまで記憶にある。

きがついたら床に転がっていて、

「たたんか！こら！たてつちゃ！！」

というどなり声がして、誰かに顔を蹴られている。

はつと意識が戻り、しゃがみ込んで「なんですか！？」「いったいなんなんですか？何かしましたか？」と聞くが、

「やかましい！でてこんか！」

・・・と訳のわからない攻防がつづき、他のお客様で体格のいい2人組がいて、その男をひき剥がしてくれたが、肝心のその男はそのまま走って精算もせずに逃げていった。

茫然としていたスタッフが駆け寄ってきたときには滝のように鼻血があふれ、上半身血まみれ・・・おまけに左目はふさがって見えなくなっていて・・・

「救急車よんで・・・」としか口がきけないユウサクだった。

救急病院で簡単に診察を受け「どこも折れてません」と言われて寮にもどるが、激しい痛みで眠れず、おまけに鼻血がどんどんできて喉が詰まり窒息しそうになる。（絶対おかしい、痛すぎる）と思い・・・1日おいて月曜の朝から総合病院で検査を受けなおした。

診断結果・・・左頬骨3か所亀裂骨折、鼻腔内の毛細血管の裂傷という結果であつた。目も白目が無くなるほど充血していたが幸い異常はなく、ただ顔左側の輪郭はドラえもん、おまけにパンダ模様腫れが治まる1週間は休みをとらされた（模様が消えるまでに半年かかりました）

そんな療養中の自分をはげましかいがいしく世話を焼いてくれたのがトモコだった。

付き合いだしたのは自然な流れであろつ。

そして3日後、自分に暴行を加えた男が何食わぬ顔でコーヒを飲みにきたところで警察に通報、そく身柄拘束となつたのだが・・・

「起訴できない」「罪にとわれない」という。

「あれが犯罪にならないならなにが犯罪になるんですか!？」

店長は食い下がるが・・・

覚せい剤中毒による精神分裂症の患者らしく、元暴力団員だったが、覚せい剤と病気の為「破門」という立場の男だという。

事情を聞くと、「あいつ（私の事）が喧嘩ふっかけてきた!」・・・と、どうやら幻覚をみていた様子。

「じゃあせめて入院命令出して下さい!」

と訴えるも、

「病院に問い合わせた結果、入院する程悪くないらしい」・・・と。

結局、相手の親（年金生活者）から雀の泣程の慰謝料を貰い、泣きねいりのユウサクだった。

みなさん世の中にはこういう人が普通に生活している!と言う事を覚えておいて頂きたい。ユウサクの場合は殺されなかっただけまし?と言えるかもしれない・・・

話かなり横道にそれてしまったが・・・次回はトモコとの最初のデートのシーンから・・・

15 禁バリバリです（笑）

つづく

ユウサクお前ってやつは（後書き）

次週、いよいよかなりのエロに戻ります。

大丈夫なのかなあ・・・15禁で。

最後の夢（前書き）

ユウサクの性癖・・・あからさまに出ます。

最後の夢

グラナダを抜け、その3ヶ月後にはバイト先の。。クスで正社員になり、人事異動を何度か繰り返し、北九州の店で知り合った女の子と恋人になってしまうユウサクだった。

トモコとの初めてのデート、福岡まで出かけ水族館にいき、食事そしてバーにいつて2人で軽く酔うまで飲んだ。待ちに待った時間が来た。

この日まで2人はキスを二回交わしただけで、ユウサクが地元の彼女と別れるのを待つての（実際は別れていなかった。嘘をついたのである。）初めての夜だった。

トモコはどちらかと言えば『可愛い』タイプの女の子で、身長も150前後、そして華奢に見えたので、あまりセックスアピールがあるほうではなかった。ところが、この子はかなり積極的な性格で、ホテルに入ってユウサクが激しくキスをしてベッドに連れていくと・

あろうことが、自分で服を脱いでしまい、あっと言う間にブラジャーとパンティーになっていた。余裕をもって（大人らしく）ふるまっていたユウサクだが、その光景を見た瞬間に理性が吹き飛んだ！

グラマーだったのである。想像の何倍も！！胸はCカップはあるであろっその布地を破こうかというばかりにたわわな谷間を見せ、細

い脚も太ももだけは肉感的な肉付きをしている。そのスタイルの可愛い顔の女の子がこちらを上目使いに見上げて体操座りをしている。あきらかに気づかれる程にユウサクの『それ』は履いていたズボンに突起を作っていた。

「もしかして・・・脱がせたかった？」

あやしげな微笑みを浮かべてトモコはいった。そしてユウサクがシヤツを脱いでいる最中にズボンのベルトに手をかけ、下ろしてしまった。

脱がされたあと、ユウサクは自分自身の膨張した部分をみると・・・だらしなく濡らしてしまっていた。

それを見たトモコは、下着にも手をかけて、

「もうこんなになってる・・・先にしてあげるね！」

そういうがはいか、ユウサク自身を『ぱくつ』と咥えこみ、「どこでこんな事覚えたんだろう・・・」と、嫉妬する程のテクニクを披露した。

ユウサクはされながらもずっとトモコのくちの中に先走った『切なさ』をだらしなく流し続けていた。

そして、10分も続けただろうか・・・ユウサクはそのままトモコの口で果ててしまった。

トモコは一度手のひらにそれを出して

「いっぱい出たね。」

と嬉しそうに言ったあと

「飲んだほうがいい？飲むの好き？」

そう言われて・・・黙ってうなずいた。

トモコは一度出したものを無言で舐めとっていき綺麗に飲み下していった。

「ごめん、先に逝ってしまつて・・・まだ入れてもないのに」

「次はあたしも気持ちよくなつていい？」

そう言われてユウサクはまずパンティーだけを脱がせた。
下着に糸を引く程に潤っているその部分に触れると・・・

「指・・・入れて・・・」

もう力を入れる必要もないほどだった。するつと指を二本飲み込んでトモコは大きな声で喘ぎだす。そしてユウサクの動きに合わせながら腰を動かし・・・自分でユウサクの指が入っている場所から2センチ上の突起をいじりだした。それまでとは一段トーンの違う喘ぎ声を出した後、静かに逝った。

そこまで来て興奮の頂点にきてしまつたユウサクは、まだ肩で息をしているトモコのなかにいつのまにか『固さ』を取り戻した『それを沈み込ませる。

「まだ！・・・ああ・・・まだだめなのに！・・・ああ・・・逝く逝く逝く」

すぐに痙攣するようにトモコは逝ってしまった。

しかし、一度出してしまったユウサクはお構いなしに何度も出し入れを続ける。

トモコは何度も何度も自分で一番敏感な部分を触りながら逝った。
ユウサクは二度目も

「飲みたい。」

というトモコの口で果てた。

しばらく2人でまったりした後、聞いてみる。

「どうして逝く時自分で触ると？」

「・・・恥ずかしい。いわな駄目？」

「うん。知りたい。」

「あたし、子供の頃からHに興味があつて・・・いつもひとりで・・・」

「オナニーすると！！！？？」

「恥ずかしい・・・言わんで・・・やけんそこを触らんと逝きにくいと。」

枕で顔をかくしながらそういうトモコにユウサクはまた欲情する。

「見たい。するとこ」

（こういうところが男は馬鹿だと女性にいわれる理由であろう。）

しばらく拒否を続けたトモコだったが・・・

30分後ユウサクの目の前で足をピーンと伸ばし、静かに一人で逝った。

それからトモコとのセックスの虜になったユウサクはフクちゃんとは月に一度程度デートし、あとはほとんどトモコと過ごしていた。そんな生活が二年程たった頃・・・

接客主任になっていたユウサクはバイトの面接をする。履歴書にめを通すまでもなく、その懐かしい顔を見て叫んだ！！

「バン！…どうしたん！…」

つづく

最後の夢（後書き）

いつたい『バン』との再会は何を意味するのか・・・

こんな最後？（前書き）

バンが面接に？！

なにやらきな臭い感じ、なにをしにやってきたのか？

こんな最後？

バンがバイトの面接に来た。

「どうしたん？家業に入ってたっちゃんかったん？？」

「いやあ・・・そのつもりやったんやけど。弟がもう後は継ぐみた
いやんね・・・俺がおったらやりにくいごたあけん、それに・・・
まだバンドしたいっちゃんね！」

「あれから全然してない？」

「いや・・・じつはグラナダ辞めたあと、キックスにはいっとった。」

「嘘お！すごいやん」

（この時期、同世代でグラナダよりもさらに知名度があつた。）

「あそこのギター（ボーカル）ひどいけん、ユウサクにも声ばかり
ようと思ひよったんやけど・・・もう就職して北九州におったけん
ね・・・して、こないだ解散したっちゃん。やけん今はメンバー探
し。」

「なるほど・・・あの頃ねえ・・・で？バイトすると？」

「いいかいな？たまに日曜出られんばってん・・・」

「よかるうもん？じゃあ採用！！」

「ええっもう?」

「大丈夫大丈夫! (笑)」

それからはだいたいユウサクはバンと一緒に仕事が多かった。そうすると・・・こうなるのである。

「ユウサク! 一回一緒にスタジオにいかん?」

「うーん・・・まあ考えとく。」

抵抗もむなしく、ひと月後にはバンドの誘惑に負けてスタジオに入るユウサクがいた。

「いいやん、ユウサクまだまだいけるっちゃんない?」

「まだまだ行けてもねえ・・・どうせ日曜とか休めんしね・・・」

そういう遊び半分のバンドをやっているうちに、メンバーが集まってきた。ドラムは年上のトシくん。ボーカルはバンの旧友であるムドー、そしてギターは・・・(ユウサクはもちろん断った)とりあえずのギタリストが入り、ライブをしたらしい。しかし一度だけの約束で入ったギタリストが抜け、またライブが出来なくなってしまう。

そしてとうとうバンから話が出た。

「ユウサク・・・しばらく仕事休む・・・とか出来んかねえ」

「そんな勝手は出来んよ。」

「もう一回夢ば見たいと思わんね？」

「それはあるけど・・・とりあえず時間ばくれん？」

ユウサクはトモコに相談する。

「・・・で、どうすると？止めてもどうせ聞かんやん。でも宙ぶらりんでバイトする・・・とかやったらいつまでもは付き合えんよ。」

「わかつとう。一年だけやらして！それでけじめつけるけん。」

ユウサクは会社を辞めた。（上司にも一年で帰ると、保険をつけた。このあたりが『覚悟』が足りなかったのかもしれない。）

相談すらしなかったフクちゃんはびっくりしていたが・・・
結局

「好きにきなさい。もう・・・」

半ばあきらめていたようだ。

こうしてユウサク23才にしてバンドマンになる。髪は金髪にして、
気合を入れた。バンド名は【プライド】

すぐにライブ！受けは上々、昔の仲間も手伝ってくれた。ジャンル
が今まで経験した事のない『パンクロック』だったのも新鮮だった。

レコーディングもして、ライブ会場で音源を配りまくった。

お陰で、けっこう知名度も上がってきたが・・・

約8か月活動したときに、メンバー全員から「解散」を告げられる。

あまりに急だったのでユウサクは食い下がる。なんの為に仕事まで
辞めたのか・・・

バンは

「すまん、すまんユウサク」

としか答えてくれない、ほかの2人はかたくなに同じ事の繰り返し。結局、一人でねばってもらちがあかないので、納得して帰った。ひどくあっさりした『プライド』の解散であった。

（ひと月遊んだら、会社に戻ろう。）

そう思い、もっていなかった車の免許を取得。トモコもようやく機嫌を直した。

ところが、ところである。

そろそろ会社に戻ろうとしたユウサクにかなりのショックを与えた出来事が起きる。

たまたま出かけたビブレホールのイベントを目で追ってみると・・・

プライドの名前があるではないか！！？
同じ名前なのかと思い、ポスターを見ると・・・まさにバン達が写っている。ユウサクの場所だけが見たこともない男に変わっている事を除いては、たしかにあのプライドなのだ。

ゆっくり考えてみた。

バンの態度、そして他の2人の態度・・・

そう・・・ユウサクは騙されて首になっていたのだ。しかし、理由が判らない、メンバーのバランス的に技術で他のものあしを引張る事はなく・・・ライブでの受けも良かった。

いまさら聞いても仕方がなかったが、バンに連絡してみた。

「すまん・・・ユウサク！だますつもりはなかったっちゃけど、お前あの二人とうまくいつとらんかったろ？」

「まあ・・・仲がいいとはいわんけど、理由はそれだけ？」

「いや・・・打ち上げの参加とか、ライブの日取り決めとかでようめめよったやん、ユウサクは仕事すっぱかしたり絶対せんし・・・」

「ええっそんな事が理由？」

「あの二人からしたら『やる気がない』って事になるらしい。俺は反対したっちゃけど、ユウサクを首にせんなら俺たちが辞めるって・・・」

「……なるほどね……バン、素直にいつてくれたらよかったのに……」

「いや、だって仕事まで辞めさせてから首つていえんやろ。」

「まあ、でもその話聞いたら、自分から辞めたよ俺。だいたい気合とかやる気とか……無いようにみえたなら、あの二人には全然俺がみえてなかったっちゃろうね。」

「まじですまん……今度のギターは若いけん、勢いはあるっちゃばってん……下手でね……また首になるかもね（笑）」

「まあいいたい！がんばってね！俺はもう足洗うけん。」

なんとも締まらない終わり方である。しかしユウサクは思った。

「自分らしくていいか……いつつも中途半端やけんね……」

こうしてユウサクの青春は一応の終わりを告げた。

それから会社にもどり、いろんな店で女の子を口説きまくり、浮気がばれて、大変な事になったり、車に懲りすぎて借金まみれになったり、まだまだユウサクの波乱万丈は続きますが……

それはまた別の機会にお話しましょう。

ながながと物語をお読み頂きまして誠に有難うございます。

読者の皆様におかれましては、またいつの日かユウサクが登場するのを待っていていただきたく思っています。

では、このへんで……

完

こんな最後？（後書き）

まあ・・・一応完結致します。

またいつの日かお会いしましょう。
有難うございました。

・・・・・・・・・・・・・・・・ユウサク

第三部「ユウサク物語」ノクターン・ノベルズにて連載開始！！
（過激すぎで、18禁の為、18才以上の方のみどうぞ。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7225e/>

少年ユウサク物語（青春編）

2010年10月12日04時21分発行